

タイトル	カナダとの姉妹都市関係の分析：世田谷区とウィニペグ市の姉妹都市関係
著者	井上，真蔵
引用	北海学園大学人文論集，34：1-101
発行日	2006-07-31

# カナダとの姉妹都市関係の分析

## — 世田谷区とウィニペグ市の姉妹都市関係 —

井上真蔵

### はじめに

カナダの都市と姉妹都市関係を結んでいる日本の都市は、市町村および都道府県を含めて2006年1月現在のところ71件である。2005年度には、76件であったので、一年前に比べると5件の減少である。近年、日本国内と同様にカナダにおいても市町村の合併が進んでおり、それに伴って姉妹都市関係の見直しが行われているようである<sup>1</sup>。

この71件のうち、約1/3にあたる26件が北海道内の自治体とカナダの自治体との提携数である。そして、東京都及びその近郊の神奈川県、千葉県、茨城県、埼玉県といった地域で考えると、姉妹都市提携数は13件あり、北海道の半分にあたり、かなりの数になる。北海道の場合には、気候・地理・産業構造などが似通ったケースが多く見られ、“sister cities”という言葉が当てはまる、いわゆる「似たもの同士」の関係がほとんどであると言ってもよい。しかし、2006年4月現在で、日本全国の姉妹都市提携総数は1,533件にのぼり<sup>2</sup>、もはや似たもの同士の関係だけではなく、それ以外の様々な関係も現れているようである。

さて本稿では、上に述べた東京都とその近郊地域の13件の姉妹提携の中

---

1 「カナダ・日本 姉妹・友好都市リスト」カナダ大使館, [http://www.canadanet.or.jp/p\\_c/sistercity.shtml](http://www.canadanet.or.jp/p_c/sistercity.shtml).

2 自治体国際化協会「姉妹提携一覧」, <http://www.clair.or.jp/cgi-bin/simai/j/00.cgi>.

から、世田谷区とウィニペグ市のケースを取り上げるものである。世田谷区とウィニペグ市は、一見して非常に対照的な都市である。世田谷区は世界的大都市である東京都にあり、しかも23区の内でも最も人口の多い区である<sup>3</sup>。一方、ウィニペグ市は大平原の州であるマニトバ州に位置しており、そのマニトバ州の州都である。マニトバ州自体の人口は僅か116万人にすぎず、州都ウィニペグの人口は68万人余りで、マニトバ州の総人口の6割余りを占めている<sup>4</sup>。

それでは、一体、このように対照的な二つの都市が、どのようにして姉妹都市の提携をするに至ったのであろうか？そして、姉妹都市提携という枠組みの中で、どのような活動を行ない、その活動にはどのような特徴があるのだろうか？自治体の、どの部署が、何をどのように担当しているのだろうか？そして、姉妹都市関係における相互交流は、どのような影響をもたらしているのであろうか？本論文は、これらの問いに答えようとする試みである。

本論文を作成するにあたり、世田谷区役所の姉妹都市担当職員の方々からは、ウィニペグとの交流に関する資料を提供していただいたのみならず、貴重な時間を割いていただき相互訪問の具体的内容に関するお話を伺うことができた。快くご協力して下さった生活文化部国際課の小野村登氏(生活文化部文化・国際課国際担当係長)、稲葉裕美氏(生活文化部文化・国際課)の両氏に、厚くお礼申し上げます<sup>5</sup>。

---

3 「都市人口の概況(平成10年9月30日現在) — 平成11年3月31日発表 — 全国市長会 — 資料編 — 2 政令指定都市の区・東京23区の人口」, <http://www.mayors.or.jp/research/jinkou/19990331/data/pop-tokyo.html>.

4 Province of Manitoba, <http://www.gov.mb.ca/faq.html#population>.

5 インタビューは、2002年9月24日と2004年6月21日の二度にわたり世田谷区役所で行われた。第1回目は、小野村登氏と稲葉裕美氏、第2回目は稲葉裕美氏のご協力をいただいた。

## I. 提携の経緯

世田谷区がカナダのウィニペグ市と姉妹都市提携をしたのは1970年のことで、提携を締結してから30余年になる。カナダとの姉妹都市提携に関しては、日本全国で第8番目であり、かなり古い部類に属すると言える。

この世田谷区とウィニペグの姉妹都市関係は、いくつかの点で、一般的な姉妹都市関係とは異なる特徴を持っている。まず、ウィニペグ市は平原州のマニトバ州の州都であるが、他にマニトバ州の自治体と姉妹提携を結んでいるのは、徳島県の石井町のみである<sup>6</sup>。平原の州、とりわけマニトバ州やサスカッチワン州などは、ロッキー山脈やナイアガラの滝のように日本人の一般的な観光ルートには入っていないし、「赤毛のアン」もいるわけではない。どちらかと言えば馴染みの薄い州である。もちろん、世界的に有名なウィニペグ交響楽団やロイヤル・ウィニペグ・バレエ団の存在はあるものの、日本では「知る人ぞ知る」と言ったところが現実であろう。

さらに、普通、姉妹都市同士は、地理、産業、気候・風土、歴史など、何らかの「類似性」を持つ自治体同士が多いが、それらの条件も当てはまってははいない。世田谷区が約80万人、ウィニペグが69万人余りと、人口規模が似ているという辺りが強いて言えば類似点と言えよう。しかし既に触れたように、世田谷区は世界的大都市東京都の中にある「大きな区」であり、ウィニペグ市は広大な大平原の州の中の「小さな州都」なのである。つまり、このような意味で、普通の姉妹都市提携関係に見られる条件は存在しないと言える<sup>7</sup>。

---

6 徳島県の石井町は、マニトバ州のミネドーサと姉妹提携をしている。カナダ大使館 [http://www.canadanet.or.jp/p\\_c/sistercity.shtml](http://www.canadanet.or.jp/p_c/sistercity.shtml).

7 「知っておきたい世田谷のデータ」世田谷区役所ホームページ 平成15年6月現在。 <http://www.city.setagaya.tokyo.jp/ward/symbol/symbol2.html>。マニトバ州政府のホームページ：Province of Manitoba, <http://www.gov.mb.ca/faq.html>.

それでは、この世田谷区とウィニペグ市を結び付けたのは、そもそも何であったのだろうか。それは、この二つの都市に住んでいる日系カナダ人たちが縁結びの役割を果たしたということである。日本とカナダとの姉妹都市関係において、これは極めて珍しいことである。ウィニペグには1,000人余りの日系人が在住しており、一方、世田谷区には、帰国して日本に住みはじめた日系人の人たちが居たのである。これらの人たちの働きかけにより、1960年ごろから小学校同士の間で絵画の交換を始まり、やがて1970年の提携にいたるのである<sup>8</sup>。この件に関しては、インタビューや資料に現れている以外に具体的な確認はできなかったが、後に触れるようにマニトバ州日系カナダ人文化センターの「日の出太鼓」や「全カナダ日系人協会」の関係者などが世田谷区を訪れている。

このような経緯から、「世田谷は住宅都市と言うか、産業という意味では目立ったものはないので、相手の都市にも経済交流は難しいと最初の段階から言っているもので…、ウニペグについては経済交流という話は聞いていない。最初から経済交流は除外ですね」と世田谷区の担当者が述べているように、姉妹都市関係にはよく出てくる「経済交流」の話は出てきたことはないと言う<sup>9</sup>。盟約書には「教育と文化、産業と経済の交流をはかり」と一般的な文言が見られるし、80年代にはマニトバ州副総督一行やエネルギー・通産・観光大臣などが訪れているので、ウィニペグ市側には多少そのような意図があったのかも知れない<sup>10</sup>。

---

8 担当の方は次のように述べている。「日系人も何千人かいらっしやる。日系人の人で日本に戻ってきて世田谷に住み始めて、第二の古里と交流をしたいという訳で、最初は絵画の交換を小学校同士が始めた。そこから発展して、姉妹都市になるという、言わば市民のサイドから始められたのです。」第1回目のインタビュー。及び資料「交流」『平成14年度東京都区市町村の国際政策の状況』p.5。東京都知事本局、2006年2月。

9 小野村氏との第1回目のインタビュー。

10 世田谷区役所生活文化部国際課「ウィニペグ市(カナダ・マニトバ州)との姉妹都市交流について」2002年4月1日(以下、「姉妹都市交流」と略す)。

## II. 交流活動

### 1. 概要

世田谷区とウィニペグとの交流活動の主なものは、表に示した通りである。この表から言えることは、一般的なカナダとの姉妹都市活動からすれば、かなり活発な様子であるのが分かる。また、他の姉妹都市関係に於いては見られない、いくつかの特徴が存在していることが分かる。

まずトップ同士の行き来は、世田谷区長のウィニペグ訪問が4回（1回は助役を含）で、ウィニペグ市長は7回世田谷を訪れている。カナダの場合は、市長夫妻を含めて3、4名という構成が普通である。首長同士の相互訪問を見れば、ウィニペグ市長の訪問の回数多くなっており、その関心の度合いを示すものだと言えよう。

世田谷区民親善使節団は、提携前の2回を含めると総計12回ウィニペグを訪問している。さらに、区議会代表の親善使節団が7回訪問しているが、その内の6回が区民親善訪問団と重なっている。これらは提携の節目となる10周年、20周年、30周年などに合わせて行われることが多く、区長・議員・区民からなる30名ほどの訪問団となっている<sup>11</sup>。さらに、これらの親善訪問団と重なって、世田谷のウィニペグ友好協会の訪問団も5回送ら

---

Winnipeg's Digital Magazine の "New Winnipeg" には、ウィニペグ市が姉妹提携している11件の都市の記載がある。移民の数が10万人もいるウクライナや3万人余りのフィリピンに関しては、提携の経緯が書かれている。ウィニペグの日系の数は1,500人程であるが、世田谷区に関しても同じ程度のスペースが割かれ提携の経緯が説明されている。その他の提携先についての説明は皆無であるところからも、世田谷区との関係には力を入れている様子がうかがえる。

<http://www.newwinnipeg.com/news/info/sister-cities.htm>.

"Visible minority population, by census metropolitan areas (1996 Census)", *Statistics Canada*. <http://www40.statcan.ca/101/cst01/demo55d.htm>.

11 区民訪問団に関しては、初期の段階では文化団体に対しては補助を出して

ウィニペグ市との姉妹都市交流史

1961.10.31		ディーフェンベーカー、カナダ首相来日歓迎大会を開催(世田谷区民会館)
1962.1.1		世田谷区とウィニペグ市の学校との間で姉妹校提携が結ばれる。(カナダ側4校に対して、日本側8校)
1964.10.8		カナダの中学生2名来訪
1965.10.17	11.8	世田谷区親善使節団ウィニペグ市を訪問
1966.11.16		カナダインディアン女王がカナダ万国博覧会協会より親善使節団として派遣され世田谷区を訪問
1969.4.22	5.11	世田谷区親善使節団ウィニペグ市を訪問
1970.10.3	10.5	ステイーブン ジューバ(ウィニペグ市長)来訪 姉妹都市提携を提案
1970.9.29		区議会、世田谷区・ウィニペグ市の姉妹都市提携議決
1970.10.3	10.5	佐野区長、区議会議長、ウィニペグ訪問。姉妹都市提携(於 ウィニペグ市議会議場)
1971.8.4		第1回世田谷区中学生親善訪問団(生徒2,引率1) ウィニペグ市訪問
1972.7.6		世田谷区親善使節団(15名) ウィニペグ市訪問(区議会代表を含む)
1973.9.4	9.22	第2回世田谷区中学生親善訪問団(生徒4,引率1) ウィニペグ市訪問
1974.2.7		世田谷ウィニペグ友好協会設立
1974.3.13	3.26	第1回ウィニペグ市中学生親善訪問団来訪(生徒22,引率4)アーサー・リーチ教育長,ラターGB校校長他
1974.5.28	6.6	ウィニペグ市制百年祭を記念し、友好協会親善訪問団ウィニペグ市訪問(区議会代表を含む)
1974.7.16	8.1	世田谷アーチェリー協会選手団をウィニペグ市に派遣(交歓競技会)
1975.10.3	10.23	第3回世田谷区中学生親善訪問団(生徒4,引率1) ウィニペグ市訪問
1976.8.1		世田谷ウィニペグ友好協会、親善使節団(中学生を含む)を派遣
1977.4.29	5.19	第2回ウィニペグ市中学生親善訪問団来訪(生徒13,引率3)市議パウル・マクゴニガル,アーサー・リーチ元教育長他
1977.8.13	8.27	ウィニペグ市日系移民百年祭を記念し、世田谷区親善訪問団ウィニペグ市訪問
1977.10.7		第4回世田谷区中学生親善訪問団(生徒4,引率1) ウィニペグ市訪問
1978.8.28	8.30	ウィニペグ市 民族舞踊合唱団ティルサ・クワイヤー(ウィラナ・ハローカ団長,一行55名)来訪
1979.7.8		第3回ウィニペグ市中学生親善訪問団来訪(生徒12,引率4)アーサー・リーチ元教育長,フレッド・オルセンGB校校長他
1979.10.30	11.1	カナダのパントマイム劇団ピヨンド・ワーズ,区立中学校4校で公演
1979.10.31		第5回世田谷区中学生親善訪問団(生徒4,引率1) ウィニペグ市訪問
1980.8.12	8.17	姉妹都市提携10周年を記念し、世田谷区親善訪問団ウィニペグ市訪問(区議会代表を含む)
1980.10.5		姉妹都市提携10周年記念植樹(於 世田谷公園)
1981.2.17		大場区長,ウィリアム・ノーリー ウィニペグ市長,姉妹都市提携確認宣言書に調印(於 世田谷区議会議場)
1981.2.17		ウィリアム・ノーリー ウィニペグ市長を世田谷区特別名誉区民として顕彰(於 世田谷区議会議場)
1981.5.18	5.31	第4回ウィニペグ市中学生親善訪問団来訪(生徒14,引率2)アーサー・リーチ元教育長,パトリシア・イエン教諭
1981.9.28		第6回世田谷区中学生親善訪問団(生徒4,引率1) ウィニペグ市訪問
1982.6.23		心身障害者施設訪問親善使節団(15名) ウィニペグ市を訪問
1982.8.22	8.25	区制50周年を記念し、世田谷区親善訪問団,友好協会親善訪問団ウィニペグ市訪問(区民20名同行)(区・区議会代表)
1983.9.19	10.7	第7回世田谷区中学生親善訪問団(生徒8,引率3) ウィニペグ市訪問
1984.3.25	4.8	第5回ウィニペグ市中学生親善訪問団来訪(生徒14,引率3)マール・ティードグロットGB校校長夫妻,ダーリン・ピーターセン教諭(GB校,バйкаウント・アレクサンダー校生徒)
1984.4.8	4.14	パウル・マクゴニガル マニトバ州副総督一行来訪
1984.4.12	4.22	ジェームス・アーンスト ウィニペグ市副市長夫妻来訪
1984.8.5	8.8	ウィニペグ市 民族舞踊合唱団ティルサ・クワイヤー(49名)来訪 世田谷吹奏交響楽団とジョイント・コンサート)
1985.8.30		世田谷ウィニペグ友好協会親善報恩団(18名)ウィニペグ市を訪問
1985.9.14		第8回世田谷区中学生親善訪問団(生徒8,引率3) ウィニペグ市訪問
1985.10.29		ウィニペグ商工会議所貿易使節団一行(16名)来訪
1986.3.29	4.13	第6回ウィニペグ市中学生親善訪問団来訪(生徒14,引率2)ヘンリー・アイザット教育長夫妻,ジョン・カデル教諭
1986.7.24	7.27	民族舞踊団サルカ・ウクラニアン・ダンスアンサンブル(44名)来訪(区民コンサートの一環として実施)
1987.8.12		世田谷ウィニペグ友好協会親善訪問団一行(19名)ウィニペグ市を訪問
1987.9.9	10.7	第9回世田谷区中学生親善訪問団(生徒12,引率3) ウィニペグ市訪問
1988.2.13		ロイヤル・ウィニペグ・バレエのプリマ イブリン・ハート来訪 羽根木公園で記念植樹
1988.2.16		ロイヤル・ウィニペグ・バレエ団 初来日公演
1988.2.15	2.19	ウィリアム・ノーリー ウィニペグ市長夫妻,ニック・ディアキュー主席理事,リック・モーリング秘書官来訪
1988.3.27	4.10	第7回ウィニペグ市中学生親善訪問団来訪(生徒12,引率3)GB校校長バレイ・パーチ夫妻,ダーリン・ピーターセン教諭
1988.8.3	8.6	世田谷区議会北米視察団(9名)ウィニペグ市を訪問
1988.11.27		ウィニペグ・アマチュア・アイスホッケーが都内アマチュアチームと親善試合を実施
1989.4.21		ジェームス・アーンスト マニトバ州エネルギー・通産・観光大臣来訪
1989.6.15		ハーブ・ステイーブン ウィニペグ市警察署長及び副署長来訪
1989.9.16	10.4	第10回世田谷区中学生親善訪問団(生徒12,引率3) ウィニペグ市訪問

## カナダとの姉妹都市関係の分析（井上）

1989.10.26		ウィニペグ市長選挙においてウィリアム・ノーリー氏5期目の再選（カナダ時間10月25日）
1990.3.25		第8回ウィニペグ市中学生親善訪問団来訪（生徒11, 引率3）GB校校長リチャード・マーティン夫妻, エレノア・マリア・イブセック教諭
1990.8.6	8.9	姉妹都市提携20周年を記念し, 世田谷区の文化団体ウィニペグ市訪問（区議会代表を含む）
1990.8.7	8.8	フォーカラム民族祭に参加（茶の湯, 生け花, 箏曲, 尺八, 吟詠, 吟舞, 合気道）
1990.10.10		大場区長, ウィリアム・ノーリー ウィニペグ市長, 姉妹都市提携確認宣言書に署名（於 ウィニペグ市議会議場）
1990.12.4		姉妹都市提携20周年記念コンサート開催（於 北沢タウンホール）ノーリー市長より, メグミ・マサキのピアノコンサートがプレゼントされた。
1991.1.22		ウィリアム・ノーリー ウィニペグ市長, 姉妹都市提携20周年記念植樹（さとうかえで）（於 世田谷区立総合運動場）
1991.9.13	9.30	第11回世田谷区中学生親善訪問団（生徒16, 引率4） ウィニペグ市訪問
1991.10.29		姉妹都市親善ピアノ・コンサート（メグミ・M.マサキ）開催
1992.3.22	4.5	第9回ウィニペグ市中学生親善訪問団来訪（生徒16, 引率4）GB校校長リチャード・マーティン夫妻, パティ・モント教諭
1992.10.25		新市長にスーザン・トンプソン女史が選出
1993.3.18	4.1	ウィニペグ市フォートギャラリー学区・ビンセント・メッセイ高校親善訪問団来訪（生徒9, 引率3）
1993.9.17	10.4	第12回世田谷区中学生親善訪問団（生徒16, 引率5） ウィニペグ市訪問
1994.3.19	4.2	第10回ウィニペグ市中学生親善訪問団来訪（生徒16, 引率3）GB校校長ピーター・フランシス, スーザン・デューク教諭, ダク・セイジャック教諭
1995.2.5	2.7	スーザン・トンプソン市長（一行3名）来訪
1995.2.6		スーザン・トンプソン市長に世田谷区特別名誉区民称号を授与
1995.2.1		ロイヤル・ウィニペグ・バレエ団 来日公演
1995.8.11	8.13	姉妹都市提携25周年を記念し, 世田谷区親善訪問団ウィニペグ市訪問（議長・議会・区民35名同行）区・区議会
1995.8.11		大場啓二 世田谷区長, スーザン・トンプソン ウィニペグ市長, 姉妹都市提携再確認書に署名（於 ウィニペグ市議会議場）
1995.9.15	10.2	第13回世田谷区中学生親善訪問団（生徒16, 引率4） ウィニペグ市訪問
1995.10.26		ウィニペグ市長選挙においてスーザン・トンプソン女史が再選
1995.11.27		全カナダ日系人協会 アート・三木前会長来訪
1996.2.6		ウィニペグ市フォートギャラリー第5学区・ヘンリー・アイザット教育長, ビンセント・メッセイ高校ジェラルド・マクロード校長来訪
1996.3.15	3.30	第11回ウィニペグ市中学生親善訪問団来訪（生徒16, 引率3）GB校校長ピーター・フランシス校長夫妻, クロアディア・バン教諭
1996.5.13	5.14	マニトバ州日系カナダ人文化センター「日の出太鼓」世田谷区を訪問
1996.7.2	7.4	世田谷区議会北米視察団（10名）ウィニペグ市を訪問/マニトバ州日系カナダ人文化センター日本庭園献入れ式に参加
1997.9.12	9.26	第14回世田谷区中学生親善訪問団（生徒16, 引率4） ウィニペグ市訪問
1998.3.22	4.1	第12回ウィニペグ市中学生親善訪問団来訪（生徒16, 引率2）GB校ジェラルド・ギル副校長, ポニー・マッカラン教諭
1998.9.20		前市長ウィリアム・ノーリー氏 在カナダ・日本大使館名誉総領事に就任
1998.11.4		新市長にグレン・ムレー氏が選出（1998.10.28選挙）
1999.7.2		区民音楽学校「サカモト・ミュージック・スクール」とウィニペグ市内の合唱グループ「ウィニペグ・シンガーズ」の競演によるコンサートを開催
1999.7.31	8.1	マニトバ日系人文化センター内和太鼓団体「日の出太鼓」が来訪し, せたがや区民まつりに出演
1999.9.15	10.2	第15回世田谷区中学生親善訪問団（生徒16, 引率4） ウィニペグ市訪問
1999.12.8		全カナダ日系人協会 アート・三木元会長来訪
2000.3.23	4.4	第13回ウィニペグ市中学生親善訪問団来訪（生徒16, 引率3）GB校リサ・ボレス副校長, ポニー・マッカラン教諭, グレン・ジュビエ教諭
2000.5.11	5.18	姉妹都市提携30周年を記念し, グレン・ムレー ウィニペグ市長（一行8名）世田谷区来訪
2000.5.15		グレン・ムレー市長に世田谷区特別名誉区民称号を授与
2000.5.16		大場啓二 世田谷区長, グレン・ムレー ウィニペグ市長, 姉妹都市提携再確認書に署名（於 世田谷区議会議場）
2000.8.15	8.20	姉妹都市提携30周年を記念し, 世田谷区議会訪問団（14名）, 世田谷区親善訪問団ウィニペグ市訪問*（区議会代表を含む）
2000.8.16		水間賢一 世田谷区助役, グレン・ムレー ウィニペグ市長, 姉妹都市提携確認書に署名（於 ウィニペグ市議会議場）
2001.3.27		ウィニペグ市リバーイースト学区キルドナン・イースト及びマイルズ・マクドナル高校親善訪問団来訪（生徒12, 引率4）東京農業大学付属第一高校と交流
2001.10.18		GB校アラン・ゲスケ校長, フォートギャラリー学区国際教育担当部長ブレント・ブル氏来訪
2002.1.13	1.26	第16回世田谷区中学生親善訪問団（生徒16, 引率4） ウィニペグ市訪問
2002.3.17	3.29	第14回ウィニペグ市中学生親善訪問団来訪（生徒16, 引率3）GB校リサ・ボレス副校長, ジム・コロミロ教諭, ステーシー・ユエル教諭
2002.9.30		マニトバ州政府国際教育交流関係責任者 ジェラルド・マクロード氏来訪
2002.10.24		ウィニペグ市長選挙においてグレン・ムレー氏2期目の再選
2003.9.17	10.4	第17回世田谷区中学生親善訪問団（生徒16, 引率4） ウィニペグ市訪問

\*「第17回ウィニペグ市派遣世田谷区中学生親善訪問団報告書」（52-60ページ）及び「ウィニペグ市との姉妹都市交流について」（2-5ページ）より作成。



れている。しかし、これらに相当する訪問団はウィニペグからは送られていない。この面では、世田谷からの一方的な訪問が特徴となっている。一般的に、カナダ側の自治体では、友好協会が中心となって日本への市民訪問団を派遣することが多いのであるが、ウィニペグ市の場合にはこのような友好協会は存在しないようである。イニシャティブを取る人材が欠如しているためか、あるいは、そのような事が困難な事情があるものと推測される。

中学生の相互訪問に関しては、非常に均衡のとれた交流となっている。世田谷からは17回の派遣団を送っている。一方、ウィニペグからは14回の訪問団が来ている。世田谷からの派遣人数は、1981年までは生徒4名と引率者1名、1983年以後は生徒8名と引率者3名、1987年からは生徒12人と引率者3名、1991年以降は生徒16名と引率者4名となっている。ウィニペグからは、最初から引率者を含めて20名前後であり、生徒だけについて言っても、10名を割ったことはない。一般的に言えば、カナダからの訪問団は人数も少ないし、回数も少ないという傾向があるが、ウィニペグの場合にはそれが当てはまらない。また、中学生の相互交流についての特徴は、ウィニペグ側は教育委員長や校長が引率してきていることである。第一回目の引率者はアーサー・リーチ教育長であったが、2回目から4回目にわたり教育長を辞めてからも「元教育長」という肩書きで引率してきている。このようなことから、アーサー・リーチ氏がかなり力を注いできた様子がかがえるし、同時にかなり自由裁量がきく分野でもあると思われる。それ以降は、第8回と第9回がGB校校長リチャード・マーティン夫妻、第10回と第11回がGB校校長ピーター・フランシス校長夫妻、第13回と第14回がGB校リサ・ボレス副校長と言った具合で、校長のイニシャティブを物語っている。

さらに、世田谷とウィニペグの交流の特徴は、文化団体の交流にある。

---

いたが、近年では公募で行きたい人を募集しているので、全くの自己負担ということである。第1回目のインタビュー。

世田谷からは3度ほどの派遣であるが、ウィニペグからは11回もの派遣をみている。例えば、民族舞踊合唱団ティルサ・クワイヤー、民族舞踊団ルサルカ・ウクラニアン・ダンスアンサンブル、そしてロイヤル・ウィニペグ・バレエ団も訪問して公演している。さらに、マニトバ日系人文化センター内和太鼓団体の「日の出太鼓」が来訪して、「せたがや区民まつり」に参加している。何しろ、ロイヤル・ウィニペグ・バレエ団も含まれているのであるから、このような交流は他の姉妹都市交流では見ることのできないものであろう。

また、世田谷区との姉妹都市関係において、ウィニペグ市という市のレベルだけではなくて、マニトバ州の州政府のレベルにおける関わり合いも見られる。1984年とかなり前のことではあるが、マニトバ州副総督一行が訪れたり、1989年にはマニトバ州エネルギー・通産・観光大臣が訪れたりしており、当時としてはマニトバ州としても産業分野や観光分野に興味があったようである。最近では、2002年にマニトバ州政府国際教育交流関係責任者のジェラルド・マクロード氏が訪れているところから、近年の流れである教育の国際化という観点からの動きと考えられる。このように州政府レベルでの関わりがあるということも一つの特徴である。人口110万人余りのマニトバ州の州都がウィニペグ市で、しかもその人口が69万人という訳である。そのような所に州政府と市役所が存在しているために、比較的風通しもよく小回りが効くためだと考えられる<sup>12</sup>。

## 2. 交流担当部署

### (1) 交流担当組織

姉妹都市関係に関しては、生活文化部の文化・国際課があたっている<sup>13</sup>。担当者は二人で、一人は4年目、もう一人は平成14年度初めての担当であ

---

12 Province of Manitoba, <http://www.gov.mb.ca/faq.html>.

13 文化・国際課は2004年度より文化・国際・男女共同参画課となり、姉妹都市に関しては国際担当係の担当となっている。

る。世田谷区の場合、ウィニペグの他に、オーストリアのドゥプリング区およびオーストラリアのバンバリー市とも提携関係にあるので、二人の担当者がこれら全てを担当している。

ウィニペグ側の連絡担当は、日本側に相当する部署というものではなく、「秘書」が担当にあたっており、連絡には主に e-mail が使用されている。これは、既に見たように、ウィニペグ市民や議会代表者の訪問団が送られたことはなく、市長が訪問する場合も市長夫妻と関係者2、3人とといった状態とも関連している。従って、ウィニペグとの連絡に関しては主に中学生の派遣や受入に関する事柄になるが、この件については、受入校のゼネラル・ビング校の担当教員と直に連絡を行っている<sup>14</sup>。

さて、中学生の派遣事業に関しては教育交流事業であり教育委員会との共催事業であるが、国際課が主として担当している。国際課は、この件に関して、大体、1月から選考方法の見直しや業者の選定を始め、4月に公募、5月に選考、6月に訪問団の編成と随行教員の決定、7月8月は準備訓練、そして9月の派遣に至るまで一連の仕事をするが、この間、担当者の一人は係りっきりとなる。

区民の派遣団に関しては、現在、文化生活情報センターが担当している。以前にはウィニペグに関する友好協会があったが、新たにドゥプリング区とバンバリー市との関係も出来たので、数年前に発展的解消がなされたとのことである。現在では、文化生活情報センターが中心となり、3つの姉妹都市を網羅する業務を行っているようである。この文化生活情報センターの事業には、中学生の時にウィニペグに行った経験のある高校生たちも企画委員として入り活動している。ホームステイの登録制度や、サポーターなどを組織に関しては、まだ整ってはいないが、目標としては「バンバリーなどは完全に自立してやっていますから、こちらもそんな風にやれば良いなと思っています」とのことであった<sup>15</sup>。

---

14 第1回目インタビュー。

15 第2回目インタビュー。

### 3. 中学生の相互派遣

#### (1) プログラムの概要

上記の交流活動の中でも、中学生の相互派遣は隔年毎に行われ、提携の翌年の1971年度から継続して行われている。これまでに、世田谷区からの派遣は16回、ウィニペグからの受入れが14回となっている。派遣生徒数は、現在では16名に落ちついている。ウィニペグからも、引率者を含めて19名ほどが訪れ、バランスが取れた交流となっている<sup>16</sup>。

選抜にあたっては、まず32校の区立中学校にたいして募集の通知が送られる。そして応募者は、「派遣事業に参加する理由書」を提出し、この作文審査によって人数が絞られる。大体、男女8名ずつを目途にしているのので、この段階では30名余りとなる。そして最後の面接では、30名余りから、男女8名ずつが選ばれるのである。

対象となるのは、区内の公立中学校のみで、私立は対象とはなっていない。応募資格は、出発時には2年生ということである。また応募者数は平均している訳ではなく、例えば6名応募者を出す学校もあれば、1名も応募のない学校もある<sup>17</sup>。

審査にあたるのは、中学校の校長会から2名、教育委員会から2名、そして引率教員の2名からなる審査委員会である。

財政的補助に関しては、400万円近い補助がでている。生徒の自己負担分は一人10万円程度で、バンクーバー及びバンフの滞在費とユニフォームを揃える必要があるのので、それらの費用に充てられている<sup>18</sup>。

研修は、7月と8月の2ヶ月間で5回行われる。研修内容は、「異文化理解ワークショップ」、「ホームステイに必要な英会話」、「研修テーマの設定」、「アトラクションの企画・練習」、「公式行事での代表生徒挨拶」などである。

---

16 「姉妹都市交流」、2-5 ページ。

17 第1回目の稲葉氏とのインタビュー。

18 第1回目インタビュー、「平成15年度ウィニペグ市派遣世田谷区中学生親善訪問団補助金及び生徒参加者の自己負担額の経費計画」

異文化理解ワークショップには、教育委員会の方から ALT が派遣される。引率教員が英語の教員の場合には、ALT と一緒になって行っている<sup>19</sup>。

派遣の時期は、9月の中旬から17日間である。夏休みの期間ではなく、この9月という時期に関しては、「子供達は授業の一環で行き、カナダの授業体験をして、課外活動と見なされる」という趣旨からである<sup>20</sup>。

なお、派遣される生徒は、カナダからの学生を受入れる際にホームステイを引き受けるということを条件にしている。

ちなみに、ウィニペグ側からの中学生は、公立校ゼネラル・ビング校一校のみで、派遣事業に関しても、担当の教員が関わり、行政はタッチしていないとのことである<sup>21</sup>。

## (2) プログラムの特徴

### A. ペア方式での受入・派遣

世田谷区の相互派遣の特徴は、ペアを組んで、派遣・受入を行っているという点である。一般的によく見かける方式は、カナダに行ってホームステイをした学生は、カナダからやってくる学生をホームステイさせるという方式である。世田谷区のペア方式は、この一般的な方式と一見似ているように見えるが、そこには大きな違いがある。担当職員の方は次のように

---

19 第2回目のインタビュー。このALTに関して世田谷区は特別な方式を採用している。ALTと言えば、普通は、JETプログラムなどで派遣される場合が多い。しかし、世田谷区の場合にはJETプログラムによるALTには頼らずに、ハンプトンという英会話学校に委託しているとのことである。32校の区立中学校があるので、そこにJETプログラムなどによるALTを派遣しようとするれば、一人3校担当するとしても10人のALTが必要となり、多額の費用が必要となる訳である。その点、都内には多くの英語学校があり、日本の事情に慣れている上に、何よりも時間単位で依頼できるので、多くの英語教師を雇うことができ、しかも費用を抑えることができるということである。

20 第1回目インタビュー。

21 第2回目のインタビュー。

語っている。

1対1ですので、このペアで受け入れてますね。例えば、志村さんが向こうのソーニアのお宅にお邪魔して、このソーニアが来た時は志村さんの家庭で受け入れてます<sup>22</sup>。

一般的な方式では、生徒自身がカナダで世話になった家庭の子供をホームステイさせるという訳ではない。ところが世田谷方式は、生徒自身がホームステイした家庭の子供を引き受けることが条件なのである。担当職員の方は、「やっぱり子供同士ですので、なかなか言葉も違うのでうまく伝わらない事もあります」と語るような側面もでてくる。さらに「本当に些細な事なんですけれども、ウィニペグの生徒はやっぱり言葉が不自由なもので通じないので、やっぱり自分のペアの生徒をすごく頼りにしてしまうんですね。そうすると世田谷の生徒にしてみれば、たまには自分は一人になりたいと思っても、うっとうしく感じたりするんですよ。」とも語っている<sup>23</sup>。つまり、1対1の関係なので喧嘩もするが、後に見るように「相手に非常に世話になり手助けをしてもらった」と実感するので、ペアを組んだ生徒の間には非常に緊密な関係が生まれるのである。

## B. 研究テーマの設定

世田谷区の場合、派遣前に生徒の一人ひとりが研究テーマを決めていくことになっている。非常に意欲的な試みであるし、生徒たちも各自が設定したテーマをしっかりと意識して観察してくるようである。

テーマは、カナダの生活、遊び・スポーツ、学校生活、環境問題、日本にたいするイメージ、カナダの歴史など多岐にわたっている。これらのテーマを決めるにあたって、前回の報告書を参考にしたり、先輩たちの意見を

---

22 同上。

23 同上。

直に聞く機会も設けられている。事前にアンケートを作成する場合には英語の先生に見てもらったりしている。行く前には、それぞれ決めたテーマについて発表する機会が設けられ、さらにアドバイスを受けて最終的に決めることになっている。また、例えば「ゴミとか環境」のことをテーマに選んだ生徒の場合は、事前にホストファミリーに連絡しておいて、ウィニペグ滞在中にゴミ処理の施設に連れて行ってもらうたりしている。現地を調べた結果は帰国後に報告書にまとめるとともに、各学校での学芸発表会などで模造紙にまとめて報告することも多い<sup>24</sup>。

このようにかなり工夫をしてテーマ選びをしてはいるものの、問題がない訳ではない。この点に関しては、担当職員の方も認識しており、次のように語っている。

なかなか研究テーマというのが難しくなってきたのかなと思うのは、やっぱり、現地に行って、現地でしか分からない事を調べて欲しいという思いがあるんですけども。今、やはり、インターネットが普及してますから、ウチへ帰って、ちょっとこう検索してやれば、出来てしまうような事もあるんですね<sup>25</sup>。

テーマの選択は生徒の興味関心に基づいているので、それを実際に現地を調べられるような形にしていくのは、かなり難しいことである。例えば、カナダの歴史やケベック問題に興味のある場合は、インターネットで調べたり、ガイドブックを読んだ程度でも、一応形になってしまう危険性がある。生徒がカナダの歴史に興味がある場合には、ウィニペグの街に残る歴史の跡と関連させるような指導が必要であろう。例えば、レッドリバーの植民地や毛皮交易が栄えた時代の知識があれば、それらが現在どのような形で残されているのかを見るだけでも、現地を訪れて観察する意義はある

---

24 同上。

25 同上。

と思われる。また、ケベック問題に興味のある場合には、ホームステイの家族の人たちにケベック問題についての意見を聞いてまとめれば立派なものになることであろう。

### C. アトラクションの練習を通して

現地に行って生徒たちが様々なアトラクションを披露することが多いが、世田谷の場合も普通は歌やリコーダー、あるいは剣舞の心得のある者が披露するといった具合である。しかし、17回目の訪問団の時には、全員参加で花笠音頭を行ったそうである。

たまたま生徒の中に花笠音頭をやっている者が居たことから始まった訳ではあるが、担当職員の方が果たした役割は非常に大きい。生徒たちの自発的意思を引き出し、関係者の協力体制を作り上げることによって初めて可能になるのである。その様子は、担当職員の次の言葉によく現れている。

全員での踊り、日本的な踊りは今までないですから。やっぱり難しい。研修の期間以外にも練習しなきゃ物にならないから。じゃー、どうする？ そしたら、子供達は、それでも、やるーって。そこのお母さんは、よく手伝ってくださって、会場の手配をしてくださったり、踊りのビデオをみんなにダビングしてくださったり、そして子供達は自宅でそれを見て自宅で練習して、夏休み中も自分たちで集まって。花笠も山形に注文して、持っていったんですよ。最初、やっぱり自分が作って、花はウチの職員が作ったんですけど。もう時間がないからって。もう自分の手で、もうほんとに家で一所懸命練習をして使ったものだから、手放したくないって、最初言ってたんですよ。最後、やっぱり向こうの家族がすごく感激しまして、ペアの生徒にあげたんですよ。そしたら、向こうの子たちは、それが嬉しくって、一緒に真似事をしてたらしいですね<sup>26</sup>。

---

26 同上。



こうして練習した成果を披露し、感激するカナダ人を見ることにより、生徒たちは達成感を味わうのである。また選抜されたときには顔も合わせたことのない「見知らぬ同士」であったのが、一つの事を為し遂げることにより仲間意識を持つことになるのである。

### III. 相互作用による影響——ウィニペグ中学生訪問団を受け入れて

上に述べたような姉妹都市関係において、ホームステイ引受家庭や担当者はどのように対応し、どのような影響を受けているのだろうか。

#### 1. 受け入れ家庭

##### (1) ネットが生み出す e-関係

現在ではインターネットがほとんどの家庭に普及しており、相互に顔を合わす前の段階から頻繁なやりとりが行われ、緊密な関係が生まれている。その様子を、担当者は次のように述べている。

ここ2、3年のことですが、eメールによる交流が行く前から随分とやっています。それも、子供達だけではなく、親も加わりながら、やるようになってますね。去年行った子あたりから、ほんとに顕著になっていますね。消しては書き、消しては書きが出来ますから、それも今だったら翻訳ソフトを使いながらやると、言いたいことは何とか言えますから。今までのように辞書を引きながらでは、ちょっとね<sup>27</sup>。

なるほど「消しては書き、消しては書き」できるので、手紙を書く時のように気構える必要はなく、簡単に書くことができるのである。そして、このインターネットに翻訳ソフトが加われば、言葉の壁もグンと低くなり、

---

27 第1回目の小野村氏とのインタビュー。

英語でのコミュニケーションも随分と気楽に行われるようになってきているのが分かる。さらに、子供達だけではなく、家族も加わっての関係が訪問前に成立するわけであり、実際に初めて顔を合わせた時には親近感が存在していることになるのである。

そして、このようなインターネットによるやりとりは、相互訪問を終えて帰国してからも、継続して行われることになるのである。担当の方は、その模様を次のように語っている。

ウィニペグへ派遣で行ってた子供さんのお母さんに聞いたのですが、ほんとうにあきれぬぐらい、帰ってくるとすぐにパソコンの前に向かって、いちいち報告してますよって、言っていましたね<sup>28</sup>。

このように、親御さんがビックリするぐらいメールのやり取りをしているようであるが、これには世田谷とウィニペグとの間で行っているペア方式（パートナーシップ方式）と関係していると考えられる。このペア方式については、既に触れたように、ステイ先の子供と訪問する子供がペアを組んで行動し、訪問した子供は自分のステイ先の子供を引き受けて面倒を見るというものであり、後にも触れるように、より緊密な関係をもたらしていると言って良いであろう。

## (2) 日本적もてなし方

しかし、一般家庭でカナダからの中学生を受入れるということは、やはり、かなりの緊張と心遣いが伺える。担当職員の方からも、「ホームステイの受け入れの段階で、ウォッシュレットとかトイレについては、使い方を説明してあげるようにと書いてあります。」とのことで、誤解を避けようとする配慮がなされている。また、家庭によっては、「電気のスイッチとか、

---

28 第2回目のインタビュー。

バスルームでもシャンプー、リンスとか英語で書いて貼ってあった所もある。」と言うことであった。口頭での説明を避けるためか、文字によれば正確に伝わると期待しているためか、恐らくその両方であると思われるが、まさに日本的な細かい気配りが見られる<sup>29</sup>。しかし、見方を変えれば、ただ英語で書くだけは、コミュニケーションの機会を奪うことになっているとも考えられる。また、英語で書くのであれば、同時に日本語の並記もすることにより、目の前の「異なる文字」を媒体として新たなコミュニケーションが生まれる可能性も十分にあると思われる。

やはり、外国からお客を迎えるとなると、どうしても精一杯もてなしたいのが人情である。担当職員の方が「日本の場合はホームステイの家庭もそうなんでしょうけど、事前にあれもしよう、これもしようと考えてるんですね。」と述べているように<sup>30</sup>、張り切ってしまう傾向にある。ところが、喜んでくれる顔を期待して頑張ったことも、結果的にはそうならないことも起こりうる。そのような様子を、担当の方は次のように語ってくれた。

最初は、勢いこんで準備をするけど、一番良かったのは、ありのままの普段の生活を見て貰うのが良かったということです。鎌倉とか富士山とか、思ったほど生徒は喜ばなかったという話もあります<sup>31</sup>。

しかし、期待外れを経験し、試行錯誤をくり返して、より良い方法を見つけだしてゆくようである。次のような担当職員の方の発言は、そのことを物語っていると言えよう。

今回あったのも、受け入れ側の体験として、男の子だったんですが、自由時間のホームステイ期間中「何をしたい、と言うんじゃなくて、

---

29 第1回目インタビュー。

30 同上。

31 同上。

これとこれとこんな事があるんだけど、どれをしたい」と聞くようにしたと言うんです。自分がカナダに行っていた時に、何をしたいと聞かれて、果たして一体、どのような選択の余地があるのか、その範囲を考えて答えるのが難しかったと言うんですね。逆に、自分がコレとコレと具体的に案をいくつか出して選んでもらうようにした。そしたら、相手にもこっちの考えていることが分かるんじゃないか、と思ったと言うんです。これは、なかなかおもしろいなと思いました。彼は彼なりに、日本で楽しんでもらおうと、色々プランを考えたんでしょ  
うね<sup>32</sup>。

もっとも、この場合には、カナダでホームステイを体験をしたという「日本以外の“もてなし方”」の影響があると言える。しかし、お互いにとって満足のいく結果を得ようとする、より柔軟な考え方が伺える。まさにカナダで得た体験の賜と言っても良いであろう。

### (3) 食事の苦勞と工夫

食事については、ホームステイ家族も担当職員も、最も気を使うところである。この点について、担当職員の方は次のように語っているが、問題の状況が伝わってくる。

事前にアンケートで情報をもらうんですけど、やはり、なかなか食べない。ともかく何を食べさせて良いのか分からない。本人の好物を聞いても分からない。…向こうもウィニペグから直ぐに世田谷に入りますから、やはりかなり疲れていて、緊張感もありますし。なおのこと食欲がなく最初のころは心配だった<sup>33</sup>。

---

32 同上。

33 同上。

そして、向こうの中学生も人によっては、日本食にチャレンジしようという生徒もいる。その事情を、担当職員の方は次のように語ってくれた。

ある家庭では、普段パンが多いらしいんですね。でも、その女の子だったんですけども、私は日本でしか食べられない物を食べてみたい。ご飯にみそ汁に焼き魚。そういう朝食をリクエストしたと。やはり、魚はあんまり好きではなかったようですけれど。やはり、みそ汁って、出汁の風味がどうしてもダメだったと言ってましたね。興味を持ってチャレンジした子もいるようですが、やはり普通に出すと、どの子もダメだったようです。食事に関しても、かなり色々苦労されているようですね<sup>34</sup>。

もっとも、カナダには給食もないので食事の面でも個人的好みははっきりと現れ、様々な生徒がいるようである。この点に関して、担当職員の方は次のように述べている。

ナマ物は食べる生徒もいますし、食べない生徒もいます。食べる生徒は、ほんとにイカとイモの煮つけから、金ぴらごぼうから、美味しいと言って食べたそうです。ただ、他には、全然食べなかったという子もいましたね<sup>35</sup>。

しかし、いきなり純和食は適切ではないかも知れない。とは言え、試行錯誤の末に、従来の考え方の枠を破り、新たな解決策を見つけだすこともある。その件に関して、担当職員の方が述べている以下の例は非常に示唆的である。

---

34 同上。

35 第1回目の小野村氏とのインタビュー。

今回、あるお母さんが、これをもっと早くやっとならば良かったと仰ったのは、居酒屋なんですね。近頃居酒屋でも家族で行く所が多いですよ。そこに行って、少しずつ取って、じゃー好きな物を食べてみなさい、と言って、それで在る程度好みを把握したと言うご家族がいらっしゃいました<sup>36</sup>。

この話から言えることは、カナダ人の生徒を居酒屋に連れて行くという考えが最初は頭になかったということである。そして、その枠から抜け出すことにより、食べ物好み判明するという解決策に至ったのである。さらに、ここで重要なのは、居酒屋を選んだということである。つまり、居酒屋での一品一品の料理は少量であるし、分け合った食べることも多いので、食べてみて嫌であっても全部食べきる必要ないのである。もちろん、家庭によっても人によっても異なるが、「西洋料理を用意しないといけない」とか「日本料理を食べさせてあげたい」などの「枠にはまった考え方」から抜け出すことの重要性を示唆している。このようにして、試行錯誤と工夫の末に、「枠に捕われず」に解決策を見つけだしていつている姿が現れている。

#### (4) 父母がうごく

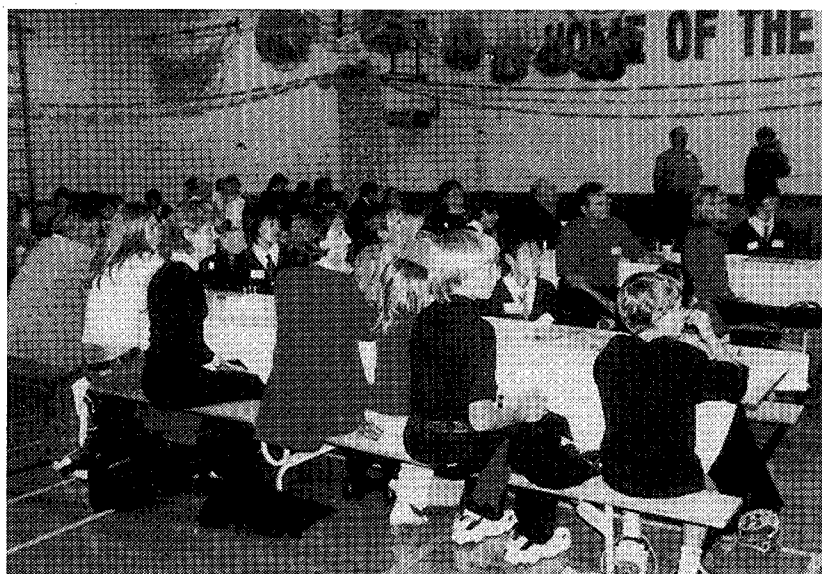
カナダでは、持ち寄りパーティをしたり、歓迎会なども受け入れ側の父母たちが自らの手で行うことが多い。このような方式は。日本では一般的ではないが、カナダ側のやり方を知ることにより変化が生まれてきているようである。「持ち寄りパーティを日本でやろうと思っても、かなり難しいのではないのでしょうか？」と筆者が尋ねたところ、担当者の方から次のような答えが返ってきた。

---

36 第1回目の稲葉氏とのインタビュー。

そうですね。子供たちも向こうですごく良くしてもらったことは、帰ってきて色々話しをしてみましても、よく分かるんですね。男の子はなかなか言わなかったりするんですけども。向こうでビデオを撮ってきましてね、その様子をお父さんお母さん方が見ましてね。そうしたら、やっぱりこちらで、やろうーと言うことになったんですね。お父さんお母さん方が、じゃー今度は私たちもガンバロウと張り切ってくださいったんです。そして早速、区役所の上のホールを借りまして、お父さんお母さん方が飾り付けから、色々手作りで、歓迎会を開いてくださいったんです。やっぱり、子供たちが向こうで、すごく自分の家族の一員として大事にしてくれたっていうのを見てると、そんな風になるんですね<sup>37</sup>。

なるほど、ビデオを見ると、カナダの家庭で自分たちの子供がいかに世



カナダ側の手作り歓迎会<sup>38</sup>

---

37 第2回目のインタビュー。

38 世田谷区役所生活文化部文化・国際課『第17回ウィニペグ市派遣世田谷区中学生親善訪問団報告書』2004年3月(以下、『親善訪問団』と略す), 10ページより。

話になったかがよく分かる。これが父親をも動かすようになったようだ。なるべく家族一緒にとの心構えで臨み、受け入れ後の意見交換にも参加をするようになっていく。その模様を、担当職員の方は次のように語っている。

受け入れの対策というのを行ったのですが、お父様も受け入れの後の意見交換にいらっしてくださったんですね。そして、自分としては頑張らなきゃーと思っていたけども、現実にはやっぱりもう緊張して一回も聞き取れなかった。やっぱり、みんなが一緒に聞いている時は、言葉は一回もでなかったと。ほんとうにマズイなと思いつつも、変な話、日本の現実ってものを見て貰えたかなーって。逆に休みの日には一緒に過ごしてくださったということですね。なかなか、お父さんも一緒にと言うのは、平日には特に難しかったー、って<sup>39</sup>。

ここには、慣れないながらもコミュニケーションをしようと努力している姿勢がはっきりと現れている。せめて休日だけでも家族全員で過ごそうとする気持ちが起き、それを実行するという事は、日本の中で忙しい毎日を送っている父親にとっては、非常に大きな変化であると言える。

## 2. ウィニペグの生徒と異文化としての東京

世田谷区の場合、ホームステイを引受けるにあたり、個室を提供できるかどうかは条件になっていない。東京の真ん中ということもあり、担当職員の方が述べているように、「やはり日本の住宅事情もあるようですが、同じ部屋で、兄弟がいる時は2段ベッドで弟さんは別の部屋で寝て貰うとか…。」と言うのが現状である<sup>40</sup>。カナダに行った世田谷の生徒たちは、一様にカナダの住宅の広さに驚きの声を上げることになるが、ウィニペグから

---

39 第2回目のインタビュー。

40 第1回目の稲葉氏とのインタビュー。



やってきた生徒たちは、ちょうどその反対の印象を持つことであろう。しかし、同時に世界一高い地価の東京の真ん中に住むことがどういう事なのかを、まさに体で感じるという経験をするのである。

ウィニペグはプレーリーという大平原地帯であり、カナダの中でも特徴のある州である。そんなウィニペグからやってきた生徒たちは、東京はあらゆる面で対照的で、目に映るもの全てが興味の対象となるようである。担当職員の方は、その様子を次のように述べてくれた。

ウィニペグから来たお子さんは、今回、マニトバ州からでるのが初めてだという子供がいたんですよ。やはり、ほんとは見る物が珍しいのか、高速道路がかなり入り組んでますよね。ああいう辺りが、珍しい。そこから遠くに見える町並が整然と並んでいて珍しくて、みんな一生懸命写真を撮ってましたねー。

やはり、向こうは高い建物が無いので、東京タワーに行くんですね。そういう高い所から見る。そこには非常に高いビルが建ってる。そういう面がスゴク、色々写真は取ってますね、みんな。ほんとうに、物珍しいんですね<sup>41</sup>。

そして、若いカナダの子供たちが興味を示すのが、東京での買い物であり、遊びである。ウィニペグでは絶対に出来ないことだし、カナダ最大の都市トロントでも出来ないことである。担当職員の方は、次のように語ってくれた。

大抵、女の子は買い物が好きなので、お台場に行ったとか、原宿に行ったとか。男の子は、映画見に行ったとか、ゲームセンターに行ったとか。もちろん、お台場なんかは、男女問わず行っているのかな。後、ディズニーランドに行ったとか。やはり、人が多いので、すごく

---

41 第2回目のインタビュー。

疲れを感じた一っつて<sup>42</sup>。

お台場とか原宿は、日本の若者たちでもワクワクドキドキする所だから、ウィニペグの生徒たちにとっては、町並みも売っている物も、そして大勢の人の波も、それまでに経験したことの無いことであるし、想像を越えた光景であろう。まさにウィニペグには存在しない東京という街の躍動を自分の体と五感で感じることになるのである。

### 3. 妹都市担当職員の場合

現場担当の職員の方々は、カナダ側からの生徒を受入れたり、ウィニペグ側の担当者と連絡調整をおこなったり、あるいはウィニペグに随行員として付き添っていたりして、カナダ人やカナダ社会に触れて、様々な影響を受けることになる。実際に、派遣・受け入れの任にあたっている担当者が、どのような影響を受け、どのようなイメージを形成するかは極めて重要なことである。

#### (1) ウィニペグからの生徒について

相互訪問にたいする目的意識の違いが表面化して現れる場合もある。ウィニペグからは20名弱の生徒たちが訪れてくるが、その中には「親善教育交流事業」の趣旨をよく理解していないではないかと思われる子供たちもいるようである。その模様を職員の方は次のように述べている。

個人的に交流をしよう、フレンドリーにしようとしらない子も混じっているんです。向こうは1校しか来てませんから。コチラは選抜しているので、そう言う意味で意識の高い子なんですね。人と親しくしようとしらない子もいるようです。もう少し、親しくしようという意欲があってもいいんじゃないか、と思います。お互いの家庭に入っちゃうと、

---

42 同上。

すごくフレンドリーな子と、今ひとつ何しに来たのか分からない、という子もいるんです。やっぱり親善訪問ということで、ホームステイということで家族ぐるみで親しくなりたい訳ですが、それが出来る子と出来ない子がいますね。ただ寝泊まりするだけで、余り交流しようという気がない子もいるんです。来る前の教育というのが徹底していないのかも知れません。今年は、たまたま男子が集まらなかったみたいで、女子生徒は結構応募があったみたいで、それで希望した男子は全部来たみたいで<sup>43</sup>。

別の職員の方は、また次のように語ってくれた。

ウィニペグの子供たちは、考え方がちょっと私たち日本とは違うのかなって思いますね。来る前に、自己紹介シートが送られてくるんですね。なぜ自分がこの事業に参加したかって、日本の文化に興味があったとか、日本に行って日本の事を色々勉強してきたいとか、色々書いてあるんですけどね。でも、なかなかそれが伴わないかなって印象ですね。まあ、みんなまだ中学生なので、やむを得ない所があるのかなーとは思うのですけれども<sup>44</sup>。

さらに、この職員の方は、日本側とは根本的に異なるカナダ側の訪問団の特徴について、以下のように指摘している。

世田谷の子供たちは、向こうの子が怪我をしてはいけないとか、色々気をつけているんですね。ところが、それにもかかわらず、向こうの子供たちは日本に来るのは、念願というか、自分の力で来たんだというのがあるんですね。自分は、日本に行くのを希望したと。そし

---

43 第1回目の小野村氏とのインタビュー。

44 第1回目の稲葉氏とのインタビュー。

て、例えばお金に関しても、お手伝いして自分で来たんだと。だから、言い方はちょっと悪いですけども、日本へ来て何をしようと私の自由によって言うところが、無きにしもあらずなんですよね。ただ、それが日本の子供たちにとっては、自分勝手だということになるんですね。ちょっと羽目を外しすぎだーって、怒る子も居ましたし<sup>45</sup>。

これらの発言は、日本側とカナダ側との思考様式と行動様式の違いを明確に現しているものである。ウィニペグの子供たちのパートナーとなる世田谷の子供たちも、担当職員の方と同様に個人としてではなく集団として行動すべきであるという日本側の視点に立って解釈しているのがよく分かる。既に述べたように、世田谷区の中学生派遣は区の事業であり、ウィニペグを訪問する中学生は32校の区立中学校から選抜されて、補助も出ているのである。そして生徒は一人ひとり研究テーマを携えてウィニペグに行くのである。従って、日本側の生徒は意欲的であり、さらに何度も事前研修を重ねて準備をしていくのである。これとは対照的に、ウィニペグからの訪問団は、行政は関与しておらず、担当教員が関わっているだけである。派遣される生徒は複数の公立校から選抜されるのではなく、ただ一つの公立校の生徒のみである。そして、恐らくカナダの他の多くの場合と同様に、公的補助はなく自己負担で来ているものと考えられる。このような意味で、行政の関与度の違い、選抜方法の違い、あるいは組織的に動くのか個人的に動くのか、などの要因が関連しているのである。上記の発言からも明らかのように、担当職員の方は日本側とカナダ側とのギャップの存在とその理由をも明確に認識しており、「異文化インターフェイス」とも言うべきものを持っている。自治体としても喜ぶべきことであり、このような能力とノウハウが、何らかの形で後継者に引き継がれるようにすることが望まれるところである。

---

45 第2回目のインタビュー。

## (2) カナダ側担当者について

### A. 担当部署の相違及びコミュニケーション

姉妹都市等の連絡・調整に関して、日本側ではどの部署が担当するのかということについては明確であるが、カナダ側の事情は必ずしもそうではない。ウィニペグの場合には、市当局が関わってくる公式行事などに関しては、「秘書係」を通して調整が行われるようであるが、中学生の相互訪問に関しては相手校の一教員が担当している。このような違いがあるために、日本側の担当者は少なからず違和感を感じることもあるようである。この件について担当職員の方は次のように語っている。

日本では姉妹都市との交流を持つ担当の部署がありますが、相手方は必ずしもそうではないですね。実際、ウィニペグの交流に関しては、私たちとウィニペグのゼネラル・ビィング校と直接のやり取りなんですよ。私たちが、ウィニペグで向こうで市長さんを表敬訪問すると、そう言った事も、向こうで滞在中のスケジュールを組んでますので、向こうが日程アレンジをしてるんですね。逆に、日本の自治体ですと、例えば、姉妹都市担当部署が区長室とそういうセクションを通して日程を設定しますけど。その辺で、向こうとこっちとでは、かなりやり方が違ってますよね<sup>46</sup>。

このような担当部署の違いに加えて、実際に中学生の相互派遣の件などに関してeメールでやり取りをする場合には、日本側担当者の「常識」では考えられない事が起こり苦勞するようである。担当職員の方は、呆れた顔をして次のように語ってくれた。

eメールのやりとりでも、コチラは連休前に出したのですね。向こうは休みでもないのに、もう返事が来ているかな、と思っても、まだ

---

46 同上。

来ていません。ほんと、よくありますよ、こんな事は。...<sup>47</sup>

こんな風に最初は戸惑いながらも、試行錯誤の苦勞の末、「適切な方法」を見つけ出すのである。この点について、担当者の方は次のように語ってくれた。

だから、逆にこちらにも期限があるものについては、何時いつまでだからと、それはちゃんとリクエストするようにしていましたね。例えば、説明会で、保護者から質問が生まれて、それに対して答えられることもあれば、現地に行って下見をしないと分からないこともあるので。そういう時は、何月何日に説明会があるので、そこで説明しないといけないので、この日までに回答を欲しいと、そんな風に期限をつけて言っていましたね<sup>48</sup>。

こうして現場の担当者も、戸惑い苦勞をしながら、カナダ側といかにコミュニケーションをすれば良いのかという「インターフェイス」を作り上げていっているのである。

## B. 物事の進め方

日本側は行政が組織として関わっているのにたいして、カナダ側は一教師が担当しているという違いも、具体的に物事の進め方の違いとなって現れてくる。日本側の担当者にとってはカルチャー・ショックであり、苦勞する点でもある。

例えば、世田谷区が次年度の9月の派遣に向けて、担当者と関係する校長先生とが会合を持って、「1年先の話でも細かくつめて、こう言った形でウィニペグで過ごしたい」などと、準備をしていくのであるが、ウィニペ

---

47 第1回目の小野村氏とのインタビュー。

48 第2回目のインタビュー。

グ側は、「具体的に何をするかと言うと、直前になって話し合いがされているような感じです。」との印象を抱いているのである。

さらに、ウィニペグ派遣の訪問団に随行して行った担当職員の場合には、カナダ側と日本側との行動様式の違いを肌で実感することになる。担当職員の方は次のように、その苦労を語っている。

それはもうある意味、苦労もしましたね。日本というのは、あらかじめ何時、何月何日、どこに行って、そこには何時何分まで居ますよ。何時何分から何時何分まで移動ですよと、きっちり決めて行きますよね。でも逆に向こうというのは、大雑把なんですよね。変な話、じゃ、この日はここに行きますよ、この日はここですよってだけで、細かいのはでてこないんです。日本式に慣れていると、日本人は不安に思うようで、その辺の折り合いをつけるのが、非常に苦労しましたね<sup>49</sup>。

このような事は何も特殊な出来事ではなくて、この担当者の方が次に話しているように、他の姉妹都市の場合にも同様の事が起こっているのである。

日本は予めスケジュールをたてて、そのスケジュールをこなすという感じですよ。それは、他の姉妹都市の方も仰ったのですが。その都市の学校の遠足では、じゃー今日は、ここに行きましょうと、博物館に行ったら休みなんです。あ、休みですね。じゃー、違う所へ行きましょうって言うのが、結構あるんですよ。日本の場合は、事前調査で行きますよね。こう言うコースをたてて、実際、ここはどうだこうだって。…その辺は、やっぱり、それもある国際理解なのかなって。結局、日本人の考えで、日本人の行動様式だけが全てでない

---

49 同上。

んだなーって、非常に思いますね。頭では分かっているけども、いざ行動すると…<sup>50</sup>。

このように、日本側の担当者は戸惑い苦勞しながらも、カナダ側とのやり取りの違いを理解し、その処理の仕方を身につけていくのである。そして、この担当者の場合には、上記の最後の部分に述べられているように、「その辺は、やっぱり、それもある国際理解なのかなって。結局、日本人の考えで、日本人の行動様式だけが全てでないんだなーって、非常に思いますね。」との認識に至っている。「頭では分かっているけども、いざ行動すると…」と留保はしているものの、カナダ人と接触することにより、以前にはなかった思考様式と行動様式、つまり「異文化インターフェイス」を身につけたと言えよう<sup>51</sup>。

---

50 同上。

51 ウィニペグを訪れる世田谷の子供たちも、カナダ的なやり方には戸惑ったようである。しかし、この担当職員の方は、子供たち自らが異文化と向かい合い解決できるようなアドバイスを与えている。もちろん、このように適切な指導ができるのは、この担当の方の個人的資質によるものではあるが、内部移動によりそのような能力が活用されなくなるのは残念なことである。ちなみに、子供たちに与えたアドバイスは以下の通りである。「結局、日本の子供たちもそれに慣れていないせいかな、聞いてくるんです、すごく細かく。この後、どこに行くんですか、ここに何時まで居ますか？って。ご免ね。それは私たちも分からないんですよ。君のペアに聞いてねって。結局、大人が先回りして聞いてしまうのも、どうかなーと。それは、私個人の考えなのかも知れませんが。スケジュールは、もちろんこちらは把握して、明日はこれがあります。だから必要なものは、これですよって指示はしますけれども。特に学校の授業に参加するためには、全部のクラスについて私たちが知る訳ないんで、それを一番知っているのは君のペアだよ。結局、そこで私としてはコミュニケーションしてほしいなってことが、一番にあったんですね。事前に相手の住所、連絡先を聞いてEメールのやりとりをしていますから。実際9月どういう気候なの？ 聞いてみようね。持っていく物、どういう物持っていくたら良い、聞こうねって。」



さらに日本側の担当者は、ウィニペグからの中学生受け入れにあたり、カナダ側と様々なやりとりをするが、そこでも日本側とカナダ側との行動の違いを感じるようである。つまり、ウィニペグ側では、担当教員一人がやっているようで、「日本と比べて非組織的な感じがする」との印象をいただいている。この理由の主な背景は、日本側では行政が全面的に関わり、一年前から準備を始め細かい点までつめているのが普通のことであるのに対して、カナダ側では派遣校である一公立校の一教員が担当しているということから、個人的な裁量余地が大きく反映されることになるからであろう。

### (3) ウィニペグのイメージ

以上のように、現場の職員の方は様々な点でカナダやカナダの人々と接する訳であるが、やはりウィニペグを訪問しての直接体験は貴重である。姉妹都市提携30周年の折に、親善訪問団に随行してウィニペグを訪れた職員の方は、次のような観察をしている。

町そのものは、日本の地方の県庁所在地のようでした。世田谷に比べると出ている人の数も少ないし、賑わいがなかったですね。人口的には60万ぐらいで、世田谷とあまり変わらないんですが、繁華街には、思ったほど人が出ていない。日系人も日系人協会とか、アイルランド人協会、ウクライナ人協会、とか何十という民族がそれぞれコミュニティーを作っているんですね。毎年、民族祭り、フォーク・キャラバンを毎年やっているんです。それぞれの民族が公共施設を借りたり、テントを張って、民族舞踊をやったりして、まさに民族のルツボのような感じで、2週間ぐらいお祭りをやっているんです。3年前に夏のお祭りに、日系人クラブの和太鼓のグループが、こちらにやってきました。日本人以上に、日本文化を一所懸命守ろうという感じなんです。市長あたりも、日系人協会にも気を配っていて、日系人協会から2人ほど連れてきてまして、フィリピンに行った時もフィリピンの人を連れていったようです。コミュニティーの人たちを大事にしているとい

う感じでした。それぞれの民族に気を使いながら政治をやっているなー、と感じました<sup>52</sup>。

まさに、「日本の自治体職員の間」で観察しているのが、よく現れている。人口規模では大した差はないので、「繁華街」と言うと、当然「渋谷」が基準になり、それで、「思ったほど人が出ていない」ということになるのであろう。フォーク・キャラバンの時期に行ったせいも、それぞれ異なる民族集団が、どのようにしてカナダ社会で生きていき位置付けられているのかを体で感じる事ができたようである。また、日系カナダ人たちが、懸命に日本文化を守ろうとしている姿を、「多民族国家という空間」の中で見ることにより、民族ということ客観的な文脈の中で捉えられているようである。そして、そのような社会の中での政治家の役割に関しても目が向けられている。このような現地での体験は、これからの日本の自治体の職員には必要な視点となるであろう。

#### IV. 相互作用による影響——世田谷区中学生訪問団の場合

世田谷の16名の生徒たちのカナダ滞在期間は17日間であり、ウィニペグでホストファミリーと共に過ごすのは12日間に過ぎない。短い期間ではあるが、みんな一様に強烈な印象を受けて帰ってくる。例えば、ある男子生徒は「あの素晴らしい日々から一体どれくらいの時間がすぎただろうか。まあ、どんなに時がすぎてもあの17日間は忘れることは出来ないと思う。」と述べている<sup>53</sup>。また、ある女生徒は、「帰国して最初の夜、私は逆ホームシックになって泣いてしまった。自分でも気が付かない程別れが辛かったのだと改めて感じ、余計に涙があふれた。」と回想している<sup>54</sup>。それでは、

---

52 第1回目の小野村氏とのインタビュー。

53 前掲、『親善訪問団』、39ページ。

54 同上、48ページ。

生徒たちはカナダを訪れて、具体的にどのような影響を受けたのだろうか。

## 1. 初めての出会い

### (1) 不安と緊張

世田谷の生徒一行はウィニペグ空港が近づくにつれて段々緊張し始め、空港でホストファミリーと出会う時には、期待と不安の入り交じった興奮状態になる。ある生徒は次のように語っているが、多分、他のみんなも多かれ少なかれ同様の気持ちを抱いていたと思われる。

カルガリーからウィニペグへ向かう飛行機の窓からウィニペグの街が見えた時はそれだけでうれしかった。そして、「ホストファミリーに会える。」と思うと、もっともっとうれしかった。でもこれからの事を考えるとそれ以上に緊張もしていた<sup>55</sup>。

こんな緊張感を抱えながらも、ウィニペグ空港に到着し、ホストファミリーとの出会いが始まるのである。ホストファミリーたちは、日の丸とメープルリーフの旗を持ち、迎える子供たちの名前を書いた紙を掲げて待っているのである。ある生徒は、その時の様子を次のように語っている。

飛行機から降り、ホストファミリーに近づくにつれ僕の心臓は高鳴っていた。目の前の階段の下には期待を持ち別の意味で緊張している16組のホストファミリーがもう見えていた。50 m, 40 m。目の前に「shunsuke!」というプラカードが見えた。僕はとっさにそこへ走っていった。そして僕のホストファミリー、「Thomas」らしき人と目が合った。僕は、「Hello. My name is Shunsuke. Are you Thomas?」と聞いてみた。すると彼はこう言った。「ワタシノナマエハトーマスデス。

---

55 同上, 37 ページ。

ハジメマシテ。」聞き終わった瞬間、全ての緊張がふっとんだ<sup>56</sup>。

別の生徒は、次のようにホストファミリーとの出会いを表現している。

「Hey Lui!」これが僕と初めて出会った時のギャレットの言葉でした。彼はカナダ国旗と日本国旗をバックに「Welcome Lui!」と画用紙に大きく書いて、高く掲げ、ウィニペグ空港の到着口の前でスウォー家のみんなと待っていてくれました。僕はギャレットと家族を見た瞬間、なぜか晴れ晴れとした気持ちになり、今まで持っていた漠然とした大きな不安が吹き飛んでしまいました。でも、僕は緊張していて、「How do you do?」と挨拶し、早々とスウォー家の車に乗り込みました<sup>57</sup>。

他の生徒たちも大体同じような心理状態であったと思われるが、次のように述べている女子の生徒もいる。

最初に Winnipeg 空港に降りた時、私以外のメンバーはほとんど不安と緊張の絶頂にいた。日頃から神経の図太い私は当然緊張するわけもなく、ただ「Alisha に会えるんだ!」とずっと考えていた。そして、空港を降りた時「Eriko!」と明るい声に呼び止められた。後ろをふり返ると Alisha がいて、彼女は私を力一杯ハグしてくれた。初めて会った人なのに私は嬉し涙をこぼしそうになった。そして Alisha と一緒に空港へ迎えに来てくれた Mom や Dad, お兄ちゃんの Sean も「Welcome! Eriko!」と言い、温かく迎えてくれた。こうして Winnipeg での生活がスタートした<sup>58</sup>。

---

56 同上, 39 ページ。

57 同上, 50 ページ。

58 同上, 48 ページ。

本人は、「日頃から神経の図太い私は当然緊張するわけもなく、ただ「Alishaに会えるんだ!」とずっと考えていた。」と述べているが、その後「初めて会った人なのに私は嬉し涙をこぼしそうになった。」と言っているように、やはりかなり興奮した心理状態にあったと言える。また別の生徒は、「僕はこの時の物凄い歓迎に思わず顔がほころんで、自分がスーパースターになったような気がしました。」と語っているように、生まれて初めての大きな歓迎を受けて興奮している様子が伝わってくる。

生徒の中には、「ホストファミリーにもすぐ会えてたくさん話し掛けてくれて、すぐ仲良くなれて嬉しかった。」<sup>59</sup>とか、「みんなとても優しく私をまるで本当の家族のように接してくれたので私はすぐうち解けることができた。」<sup>60</sup>と述べている生徒もいる。しかし、随員の職員の方が語るように、第三者の目からすれば、次のようはかなり緊張した状態であったのが分かる。

行く時には最初の三日間はずっと一緒の行動だったんですが、三日目にウィニペグに着くと突然、もう緊張するんですよね。向こうは、よく来たねーって迎えてくれるんですよ。ところが、怖がってるんですよ。着いた日には、学校の体育館で歓迎会を開いてくれたんです、持ち寄りの夕食会で。その時に、結構もう堅かったんですね。やっぱり、例えば、部屋はどうする？ 一人がいい、二人一緒に寝る？ もう簡単に聞いてくださったのも、なかなか固まって言えなかったのですね<sup>61</sup>。

いずれにせよ、「赤と白のカナダの国旗」やそれぞれのパートナーの「名前が書いてある手作りのプラカード」が広がっていて、人前も気にせずハ

59 同上, 40 ページ。

60 同上, 43 ページ。

61 第2回目のインタビュー。

グし、緊張をほぐすために声をかけてくれるカナダ式出迎えが繰り広げられるのである<sup>62</sup>。

## (2) 話が通じない

さて、ここからいよいよ生徒たちの異文化の中での格闘が始まる。まだ慣れていないせいもあり、生徒の中にはホストファミリーの家族の人たちが何を言っているのか分からない者もいた。その様子を、生徒たちは次のように語っている。

ホストの Jenica に会った時、一つ年下なのに大きいというのが印象的だった。ウィニペグ空港で私達はあまりのうれしさに抱き合った。夕食会へ向かう途中、ホストファミリーの方達は色々話しかけて下さった。でも私は何を言っているのか理解できず、首をかしげてばかりいた<sup>63</sup>。

空港に着くと大勢の人たちがいました。みんなはすでにホストファミリーの方々と戸惑いながらも楽しそうに話していました。僕もパートナーを探していると、向こうから声を掛けてくれました。相棒のベンは写真よりも話しやすそうで明るい様でした。彼の方からお馴染みの挨拶をしてくれました。僕も俄仕込みの英語で会話をしようと試みました。が、やはり通じず、駄目でした。

同じ訪問団員の池谷君に、黙りこくっている僕は「お前、緊張しすぎだよ。」と言われてしまいました。本当は自分の不甲斐なさに呆れていました<sup>64</sup>。

---

62 前掲、『親善訪問団』, 38 ページ。

63 同上, 49 ページ。

64 同上, 42 ページ。

多分、みんな単語を並べて必死に伝えようと格闘していたと思われるが、この生徒のように余りにも緊張しているため、「みんなはすでにホストファミリーの方々と戸惑いながらも楽しそうに話していました」というように見えたのであろう。いずれにせよ、似たり寄ったりの経験は誰もがすることであり、これが生徒たち自らが最初に乗り越えなければならないステップなのである。

### (3) 不安から安堵へ

ホストファミリー側も、生徒たちが一刻も早く慣れるようにと気を遣ってくれ、生徒たちもその様子を十分に認識している。ある男子生徒は次のように語っている。

そして空港に着き、エスカレーターを降りると「Welcome Makoto」と書いた紙を持った Matthew が見えた。…「これから本当にホームステイが始まるんだ。」という実感しかその時にはなかったから、「うまくやっていけるかな？」という不安があったけれど、車での移動中、常に話題を作ってくれたり、面白い事を言ったり、と今までの不安をすぐに忘れさせてくれた<sup>65</sup>。

このような雰囲気の中で、生徒たちもホストファミリーにたいして積極的に働きかけていっている。それは初めての経験で、勇気のいることであるけれども、その様子を男子生徒の一人は次のように述べている。

車内では一言も話せませんでした。僕は勇気を出して、学校の問題を出しました。すると、みんな喜んで話をしてくれたので、ホッとしました<sup>66</sup>。

---

65 同上, 37 ページ。

66 同上, 50 ページ。

最初から、もっと必死になってぶつかっていった生徒もいるが、そのような場合には、気が付いてみると相手と話をしていたというような状況であった。その模様は、次の女子生徒の言葉に現れている。

9月20日、ウィニペグ空港で Sarah をすぐ見つける事が出来た。「日本に送られてきた写真と全く同じ垂れ目の女の子」。これが第一印象だった。空港では、自分の知識の限り英語を話した。“Your English is very good!” と言ってくれた時はとても嬉しかった。気付いたら、緊張なんてものは無かった。会う前までの吐きそうな程の緊張も、Sarah や彼女の家族 (Host family) に会った瞬間に解れたのだった<sup>67</sup>。

このように、生徒により多少の違いはあるものの、伝えようという意欲と態度をもって格闘しながらも、「初めて出会う人たちと話し合える関係」を作っていくのである。そして、後になって振り返ってみると、「一緒にいることによっていつの間にかお互いのことが分かり合えるようになっていく」ようである<sup>68</sup>。

## 2. ホストファミリーとの生活

世田谷の生徒たちは、ウィニペグ滞在中に様々なものを見て、驚き、発見し、考えることになるが、まずは12日間を共にするホストファミリーの家に到着し、その住宅に驚くのである。

### (1) カナダの家

カナダの家は2×4方式の住宅であり、規格自体が大きく、ドアの高さなども2メートル以上あるので、日本の住宅の感覚からすれば非常に大きな空間だと感じる。生徒たちは、素直にその驚きを述べている。

---

67 同上, 41 ページ。

68 同上, 47 ページ。



しばらくして、GB校に着き、夕食会后、やっとスウォー家に到着しました。中に入ると広くてびっくりしました<sup>69</sup>。

住宅が大きくなると、日本とは異なり総地下が普通であり、プールがある家も珍しくはない。ある生徒は次のように語っている。

Ryanの家はとても大きくて地下に部屋があり、裏庭にジャグジーと縦20mくらいの大きなプールが一つずつありました。休日にはそこで他の友達と一緒に泳いだり裏庭で家族と一緒にバーベキューをしたりしました<sup>70</sup>。

広いのは住宅だけではなく、庭の大きさも日本を基準にすれば信じられないような広さである。ある男子生徒は「Jamieの家は大きくて、庭は奥中校庭の半分くらいあって驚いている。」と述べている<sup>71</sup>。

そして、そのような住宅の一部屋を使わせてもらったり、ある場合には「地下室を丸ごと貸してくれたり」するのである<sup>72</sup>。ゆったりとした空間で暮らすことができる生活の質ということについては、多分、まだ中学生のせいかな、明確な言葉では表現してはいない。しかし、生徒たちは十分に意識してはいないものの、後に「ゆとりのある生活」と述べる時に、その重要な一部分であることは間違いない。

## (2) カナダの食事

カナダの家庭では、朝食は割と簡単に済ませる家庭が多いようで、男子生徒の一人はあまりにも簡素な朝食に思わず驚きの声をあげている。

---

69 同上、50 ページ。

70 同上、38 ページ。

71 同上、40 ページ。

72 同上、42 ページ。

ホームステイ中、一番驚いたのはカナダの食生活が自分の想像とかなり違うことだった。僕はカナダの人は日本人と比べて多く食べると思っていたが、その考えは2日目の朝ご飯で早くも打ちくだかれた。朝ご飯の内容は、ワッフル2枚。思わず僕は日本語で、「これだけ？」と言ってしまった<sup>73</sup>。

また別の生徒も同様に朝食の様子について触れている。

カナダの朝食は少なく、フレンチトーストやパンケーキ、コーンブレックなどにオレンジジュースといった飲み物がつく程度だったり、飲み物だけとか何も食べない時もある<sup>74</sup>。

カナダ人の食生活を研究テーマに選んだ生徒は、昼食や夕食について、次のように観察している。

昼食も夕食も朝食と比べると結構しっかりと食べる。ナイフとフォークが必ず付き、夕食には肉や時々サーモンが出たりもした。また肉や魚と同時に野菜をよく食べていた。例えば、サラダを大量に食べ、それで夕食終了という時もあった<sup>75</sup>。

そして、夕食の後には「必ずクッキーやデザートがでてきました」と述べ、日本との違いを指摘している生徒もいる<sup>76</sup>。

さらに食べる事に関して、日本とは決定的に異なり生徒たちを驚かせたのは、間食の多さであり、食品の大きさであった。ある生徒は次のような

---

73 同上, 39 ページ。

74 同上, 29 ページ。

75 同上。

76 同上, 23 ページ。

観察をしている。

カナダの人の間食はとにかくすごかった。まず、学校でおかしを食べるといのはあたり前のようだった。この点がまず明らかに日本と違う。またGB校内におかしの自動販売機もあった。それから家に帰ってからは、パイやクッキー、キャンディー、グミなどをとにかくたくさん食べていた。夕食を食べ終わってからも、ポテトチップやケーキを食べたりしていた<sup>77</sup>。

カナダのスーパーの棚に並んでいたのはとにかく大きくて安かった。バケツのような入れ物に入ったアイスクリームが3ドル(およそ300円)だったり、ピッツァなどは日本の二回り分は大きかった<sup>78</sup>。

このようにスナック菓子やファーストフードなどの高脂肪・高カロリーの摂取をすれば、当然のことながら肥満になってしまう。カナダの大人も子供もその多くが肥満に悩まされ、今や社会的な問題にもなっているのも納得できる。しかし、上のように観察しながらも、なぜかこの生徒は「カナダ人は間食をよく取るが、その分だけよく動く。だから決して太りすぎるといふことはない。」と結論づけている。現地のゼネラル・ビング校にも肥満の生徒は見受けられるようだし、どうして「決して太りすぎるといふことはない」との結論に至ったのかは非常に疑問である。

### (3) カナダの家族

#### A. 家族そろって

現在の日本では、家族そろって食事をすることも稀になっているし、家族一緒にビデオを観たりすることも珍しくなっている。ところが、カナダ

---

77 同上, 29 ページ。

78 同上。

の家庭に入ると、そのような光景を目の当たりにするのである。そして、カナダの家族関係は世田谷の中学生の目には新鮮に映り、以下に述べられているように、うらやましくも感じられるのである。

私が一番うらやましかったのが4：30頃にはDadが帰ってくる事です。日本は朝早くに仕事に行き、夜遅くに帰宅する事が多いため家族そろって夕食を食べることが減っています。でも、カナダでは毎日家族そろって夕食を食べました。日本でもいつかそうなると思います<sup>79</sup>。

僕のホストファミリーはほとんど家族全員で食事をした。塾や習い事はなく、食後も家族で映画を見たり、今日何があったかを話したりした。マンガ本が全くなく、CDやDVDが壁一面にあった。CDの値段は14\$ (1,300円)、DVDは20\$ (1,800円)ときいた。(1\$ = 90円)。CCレモンのキャラクターのthe simpsonsとお笑いドラマのfriendsが人気番組だった<sup>80</sup>。

このように、家族全員で食事をするのが普通のことであるのがよく分かる。さらに家族そろってDVDを見たりCDを聞いたりする様子もうかがえる。また、一人で読むマンガ本が全くないことから、家族そろって過ごそうという一家の方針が見てとれる。

さらに、日本では中学生ともなると両親と話をすることは少なくなるのが普通であり、そんな日本の中学生の目からすると、カナダの親子関係は目をひくのである。男子生徒の一人は次のように観察している。

ベンはお母さんとの2人暮らしですが、何度も明るく、会話をして

---

79 同上、23 ページ。

80 同上、20 ページ。

いるのを見ていると喜劇の様で、思わず吹き出してしまいました。ベンの御祖母の家には大きな犬がいます。彼女の名前は聞きそびれましたが、ベンは最高の友達なのだと言っていました<sup>81</sup>。

この場合には、母一人、子一人という家庭の事情があるのかも知れないが、母と子の間の緊密な関係が伝わってくる。しかし、上にも「食後も家族で映画を見たり、今日何があったかを話したりした」と触れられているように、家族の間で様々な事柄について話し合うのは、ごく普通のことである。また、上記のベンと祖母との記述から、ベンは一軒家に住む祖母をよく訪れるようで、祖母との微笑ましい間柄が伝わってくる。このようなカナダの家族のあり方に接して、カナダ人の家族にたいする価値観を知り、日本の状況を客観的に認識することになるのである。

#### B. 週末は別荘で

週末には湖の畔にある別荘で過ごすことも珍しいことではない。世田谷の生徒たちの中には、ホームステイの家族と共に週末を別荘で過ごすという体験をした者もいる。その模様を次のように述べている。

土、日曜日には Sarah の家の別荘に連れて行ってくれた。別荘にはボートがあり、それに乗せてもらい、さらに運転もさせてくれた。その別荘では、日本で決して体験することのできない、貴重な経験をすることができた<sup>82</sup>。

Winnipeg は土地が広く安いので、別荘を持っているのは特別すごい事ではないようです。私は Amy の家が別荘を3つ持っていると聞いた時、とても驚きました。Amy は夏休みは別荘に行って目の前にあ

---

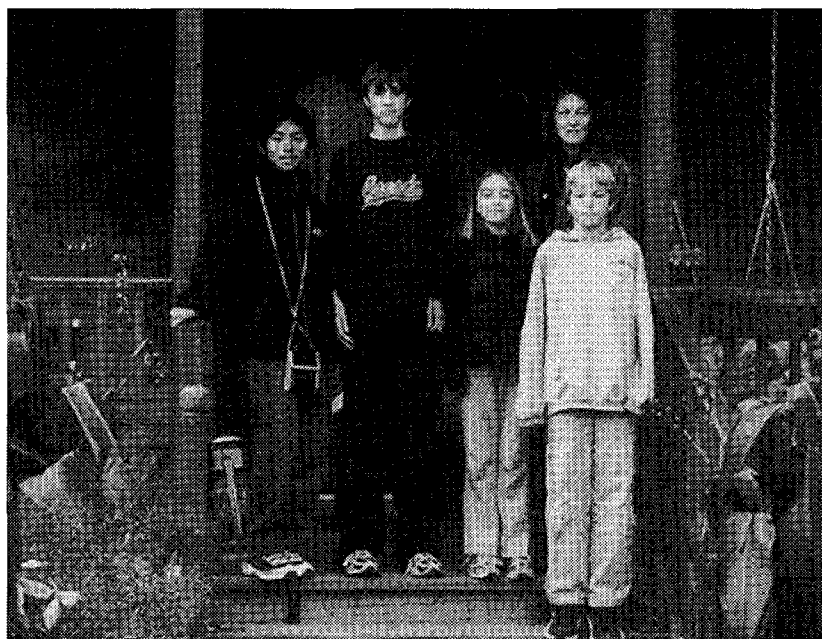
81 同上, 42 ページ。

82 同上, 41 ページ。

る湖で泳ぐそうです。そして冬には水面が凍ってスケートができると聞いて、カナダの1年の気温の変化の激しさを知りました<sup>83</sup>。

僕のホストフレンド Matthew と坂田君のホストフレンド Brian はとても仲が良かった。だから学校の帰り道はいつも一緒、お互いの家で遊んだり、Brian の家族の別荘にも行った<sup>84</sup>。

日本語で別荘と言うと豪勢な邸宅のイメージがあるかも知れないが、カナダでは cottage と言って、普通は湖の畔にある簡素な家である。土地も安いので数百万円で手に入るが、夏や冬には非日常的な生活を味わうことができる。いずれにせよ、週末に別荘生活を体験した世田谷の生徒たちは、カナダ人の生活の仕方と生活の質をも知ることになるのである。



大好きな家族<sup>85</sup>

---

83 同上，23 ページ。

84 同上，37 ページ。

85 同上，50 ページより。

### C. 家族の一員として

世田谷の生徒たちの口からよく聞かれるのは、「家族」という言葉である。「新しい家族」とか「ほんとうの家族」とか「最高の家族」と言った表現である。これらの言葉は、生徒たちがホームステイをして、どのように感じたのかを端的に現している。生徒たちは、具体的には次のように述べている。

わたしはカナダで新しい家族をつくることができた。わたしのホストファミリーはホストのNatasha, 3歳の弟NicholasとDadとMomだ。Natashaは明るい元気でおもしろいひとだった。Natashaとは12日間で、とてもいい友達同士になれたと思う。でも仲良くなるまでには少し時間がかかった<sup>86</sup>。

Amyの家族はDad, Mom, Callum(兄), Jane(姉), Amyの5人家族。みんなとても優しく私をまるで本当の家族のように接してくれたので私はすぐうち解けることができた<sup>87</sup>。

Alishaは常に私のことを気遣ってくれて、「Are you OK?」とか「Is everything OK?」とか聞いてくれた。私が、Bird familyを自分の家族のように感じたのは、一泊旅行から帰って来た時だった。家に入った瞬間、私は妙に安心してしまい、Momや弟のAaronの笑顔を見た時は自分の本当の家族といるようだった<sup>88</sup>。

つまり客人としてではなく、家族の一員として接してくれるということであり、この事を同行した職員の方は次のように話している。

---

86 同上, 45 ページ。

87 同上, 43 ページ。

88 同上, 48 ページ。

やっぱり、むこうの方が日本人とは違って、もてなすのが上手いなーってというのは感じましたね。お客さん扱いはしないですね。ほんとに、もう家族の一員という感じで<sup>89</sup>。

客人扱いをしないということは、特別な準備をするのではなくて、普段の生活の中で受け入れるということである。それは簡単なように聞こえるが、ある男子生徒は次のように語っている。

ベンの母親のドーナは毎日朝一番に起き、僕等が朝食を食べ終えた後、車に乗せて学校に連れて行ってくれます。しかし、午後の迎いの車は大抵は池谷君のパートナーのスコットの車か、スクールバスです。微妙な所で探求心の強い自分ですから、職業を聞いてみました。すると盲学校の教師なのだと答えてくれました。何だか、何とも言えない衝撃に駆られました。毎日が大変なはずなのに、僕が家族の中に入り込んでしまったことに何も感じていないのだろうか。しかしそれから何時もと同じ優しそうで、明るく朗らかな笑顔は変わりませんでした。僕は、とても気丈なお母さんだと思いました<sup>90</sup>。

この男子生徒の感覚が、一般的な日本人の感覚なのかも知れない。母親一人で、しかも盲学校の教師をして働いている訳であるから、日本の場合はホームステイを引き受けようなどとは考えもしないことかも知れない。しかし、上の記述にもあるように、車で学校に送っていくものの、帰りはスクールバスか知り合いの車である。特に気負うこともなく、出来ることをしているという訳であろう。しかし、この男子生徒が「僕は、とても気丈なお母さんだと思いました。」と感心しているように、日本人にとっては学ぶべき新しい世界だと思われる。

---

89 第2回目のインタビュー。

90 前掲、『親善訪問団』、42ページ。



さて、そのような日常生活の中で、しばしば“Are you tired?”とか“Is everything OK?”と、気遣って声をかけてくれるのも、世田谷の生徒たちにとってはホッとすることなのである<sup>91</sup>。そして、たまたま失敗をした時でも、その対応の仕方が心としますようなものなので、それを切っ掛けに益々好感を抱かせるのである。例えば、ある女子生徒は次のように述べている。

私は、1日目の朝から Host family の心の暖かさを感じた。朝ごはんまでソーセージが出た時、私は丸ごとそのソーセージを落としてしまった。「ああ!やばい!」と思っていたその時、犬の Harley が、私の落としたソーセージを食べてしまったのだった。私は、益々まずい気持ちになっていた。しかし、Host family は Harley に対して陽気に“You're bad puppy.”や、“You're lucky puppy.”などと言い、私には“Harley loves you!”という優しく、面白い言葉をかけてくれたのだった。この時、私はこの Host family はとても素晴らしいと思った<sup>92</sup>。

このようにして、ホストファミリーと過ごす日々の中で、生徒たちは日本とは違った家族のあり方を知り、家族の一員として人を受け入れるという事がどのような事なのかを体験するのである。

#### D. パートナーとして

世田谷とウィニペグの場合には、既に述べたように、パートナーというペア制度を採用しているので、パートナーとなる生徒たちの関係は特別なものとなるようである。その様子を、生徒たちは次のように話している。

こうして楽しい日々はあっという間に過ぎていった。この12日間

---

91 同上, 38, 48 ページ。

92 同上, 41 ページ。

Matthew とはいろいろな事を話した。時にはケンカもした。でも彼はいつも僕の事を第一に考えてくれて常に僕のペースに合わせてくれた。

別れの朝、そのせいだろうか、本当に疲れた顔の Matthew が印象的だった。僕はこのカナダで素晴らしい家族ができた。僕はカナダに来て本当に良かった。最後に、Thank you for wonderful memories!<sup>93</sup>

僕は Scott と家族や日本のことについていっぱい話しました。話している時に気がつく僕は Scott に返事の際も与えないくらいに喋っていました。しかし、Scott は少しも嫌な顔をせず、僕の目を見て話を聞いてくれていました。フォークスに行った時も、最初にどこに行きたいか聞いてくれ、終始僕のペースで行動してくれました。ある日、僕が誰かと遊びたいと我儘を言うと、近くのメンバーを呼んでくれた時もありました。Scott が僕のしたいことをやらせてあげようと、頑張ってくれたことがとても嬉しかったです<sup>94</sup>。

驚くべき事に、世田谷の生徒たちは、「彼はいつも僕の事を第一に考えてくれて常に僕のペースに合わせてくれた」とか、「最初にどこに行きたいか聞いてくれ、終始僕のペースで行動してくれました」と述べているのである。さらに、「僕が誰かと遊びたいと我儘を言うと、近くのメンバーを呼んでくれた時もありました」とあるように、かなり「我儘」を言ってる事を、自分でも認識しているのである。

日本人の行動であれば、このように相手に合わせるという事は、よくある事かも知れない。しかし、カナダ人の場合、「パートナー」という制度がなければ考えられないことである。この制度により、パートナーとなった世田谷の生徒とウィニペグの生徒は、いつも一緒に行動することになるの

---

93 同上, 37 ページ。

94 同上, 44 ページ。

である。例えば、ある女子生徒が語っているところから、その一端を窺い知ることができる。

ショッピングに行った時。Natasha が売り物のボールでジャグリングをやってくれた。そして「I like this one.」なんて言って靴をはいてみたり、服に体をあわせてみたりして盛り上がった。

またある朝、Natasha が急にわたしの写真を撮ろうと追いかけてきた。逃げようとしたけど撮られてしまった。そこでわたしもカメラを持って Natasha を追いかけた。朝から家の中を走りまわった<sup>95</sup>。

さらに、後に見るように、スポーツや音楽、遊びや笑いを共有することも、非常に特別な関係を作り上げるのに役立っている。こうした関係があるからこそ、帰国してからも頻繁にメールを送り、今度日本に来た時には「カナダでしてくれたような事をしてあげたい」と強く思うのである。

### 3. ゼネラル・ビング校を訪れて

カナダの中学生が、どのような学校生活を送っているのかは、やはり同じ年代の中学生としては最も興味関心のある分野であるし、生徒の中には学校生活を研修テーマに選んだ者もいる。世田谷の中学生たちは、平日はゼネラル・ビング校に通って授業を受けるが、そこで何を見て、どのように感じたのかを見ていこう。

#### (1) 生徒の一人ひとりが個人として

世田谷からの中学生たちは、緊張気味でゼネラル・ビング校に足を踏み入れるが、その時、日本の学校とはかなり異なった雰囲気を感じるのである。何人かの生徒たちは、異口同音に次のように語っている。

---

95 同上, 45 ページ。

僕は初めて GB 校に行った時、とても緊張していました。しかし、誰もが僕に「Hello」と挨拶してくれるので、次第に緊張もほぐれていきました。Scott がクラスメイトに僕のことを紹介してくれて以来、教室に入ると「Nori!」と呼んでくれて、僕のことや日本のことについて話し合えたことがとても嬉しかったです<sup>96</sup>。

初めて GB 校に行く日の朝、私は少し緊張していた。みんなと仲良くなれるか不安だった。でも GB 校の友達はみんな気軽に声をかけてくれて、とても居心地がよかった。授業はさっぱりわからなかったけど、何だか楽しかった<sup>97</sup>。

初めて GB 校に行った時も、Nicole の友達が声をかけてくれて、折り紙で鶴を折ってあげるとすごく喜んでくれたので折った私も嬉しい気持ちでいっぱいになった<sup>98</sup>。

GB 校では、誰かが Jamie! と声をかけるたびにその友達を一人一人紹介してくれて、たくさん友達が出来た。みんなとてもバスケが上手でスケートも上手で、スケボーなんか技持ちだし、運動おんちゼロって感じだった。クラスの自己紹介で折鶴を、送別集会では花笠などをやったけど、本当に拍手喝采でみんな心の底から楽しんでくれたようだった。どれも大成功で、自信が持てたしやり遂げた達成感を感じた<sup>99</sup>。

日本の学校では、外国からの生徒に声をかけるのは少数の者だけではな

---

96 同上，44 ページ。

97 同上，43 ページ。

98 同上，47 ページ。

99 同上，40 ページ。

いだろうか。このように気軽に声をかけることもないし、掛けられたこともないので、その違いが際だって感じられるのである。さらに、「声をかけるたびにその友達を一人一人紹介してくれる」事にも、日本との違いを感じたはずである。カナダ的やり方に出会うのは初めてであるが、これにより一挙に壁が崩れ親しみ湧くと感じたようである。言葉により明確には意識されていないものの、人と出会う時の新たな方法が生徒たちの頭の中にある体験の引き出しに入れられたはずである。

## (2) 自由な雰囲気

さらに世田谷からの中学生たちを驚かせるのは、日本の学校では考えられない自由な服装やアクセサリが許されていることである。ある生徒は、「私服でピアス、ネックレスもありだった」と驚いている<sup>100</sup>。別の生徒は、そのような様子を見て、授業のことを心配して、次のように述べている。

そして平日はゼネラル・ビィング校での授業を受けにいきました。最初ゼネラル・ビィング校に行って、カナダの学校では日本とは違ってガムを噛んだりアクセサリを付けたりすることが許されているという事を知った時、きちんと授業が受けられるのか心配でした<sup>101</sup>。

日本では、そんな服装をしピアスやネックレスを付け、ガムを噛んだりしている状況では、まともに授業に臨む態度ではない。従って、「授業が受けられるのか」と心配するのは当然のことである。しかし、後に授業を受けてみると、心配したような事は起こりはしなかった。そこで発見したのは、次の項で見るように日本では全く考えられないような状況であったのである。

---

100 同上, 20 ページ。

101 同上, 38 ページ。

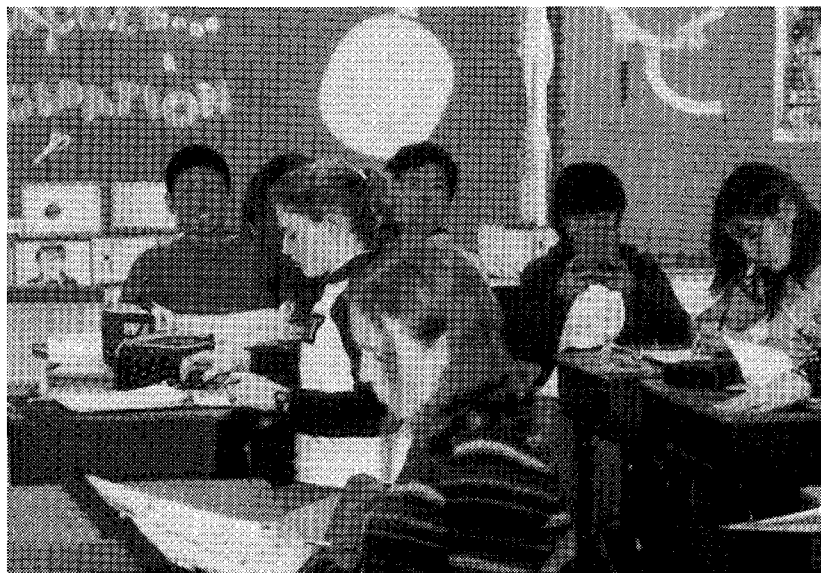
### (3) 授業内容と態度

教室に入り、やはり一番先に目に付くのは、授業中の態度であろう。ここでも、日本では見られない、次のような授業態度に出会うのである。

授業中にお菓子を食べたり、足を机の上に置いていたりしているのに、先生の話はよく聞いていたし、発言も多かった<sup>102</sup>。

日本では、このような状態であれば授業が成立しないが、カナダでは違っていた。普通、日本では「授業中にお菓子を食べたり、足を机の上に置いていたりしている」生徒は、授業を受ける意思はなく、教師の話に耳を傾けたり自発的に発言をすることなどあり得ない。しかし、カナダの教室では教師と生徒の間に活発なやり取りが行われるという訳で、日本の教室では見られない授業展開に出くわしたのである。

さらに、学校生活に関して研究テーマとした生徒は、授業内容や進め方について、次のように観察している。



自由な服装で授業<sup>103</sup>

---

102 同上，20 ページ。

103 同上，10 ページより。

クラスの人数は1クラス25人位。授業は選択制。毎回人数が変わる。授業は40分で、休憩が5分だが、実質30分で10分が自習形式。チャイムが鳴ったら終了の挨拶もなく次のクラスに移る。僕が参加したのは数学、英語と体育だった。数学1はパソコンを使った演習クラスで各自ファイルを持っていて問題の続きをやっていた。数学2は講義形式で、ノートはいっさい取らず、問題集と書き込みプリントがあった。英語はポスター作りの演習で、与えられた条件に合ったポスターを各グループで作成した。体育は体育館で、指定の体育館履きも体操着もなかった。サッカーゲームというよりみんなで玉けりをして4つあるゴールにシュートできたら先生に報告するということをした<sup>104</sup>。

そして、また別の生徒は“English Language Arts”のクラスでは、「広告で使われている文章には…どのような工夫がされていて製品を宣伝しているのかを学び」、「情報を鵜呑みにしないことを学ぶ」メディアリテラシーのクラスも知るようになる<sup>105</sup>。

要するに、少人数で生徒の意思に基づく選択制が基礎になっている。授業のやり方は、数学も英語も演習形式が中心であり、体育も服装は自由で教師に成果を報告すると言った具合である。日本のように教員が一方的に教えるというのではなく、生徒の自発性を基礎としている。別の生徒は「教科の中には“FUTURES IN BUSINESS”、“LEADERSHIP”といった私達にはないものもありました。」<sup>106</sup>と指摘をするに止まっているが、「社会に出て自分で考え行動していく」という視点から考えると、これらの科目の必要性は十分に納得できるものである。

このような日本とは全く異なった授業風景に出会い、何日間かそのような空間で授業を受けた生徒の一人は次のように語っている。

---

104 同上。

105 同上, 16 ページ。

106 同上, 28 ページ。

勉強に向き合う姿勢には衝撃を覚えた。勉強はしなきゃいけないもの、じゃなくて、するもの、分かる嬉しいもの、分かりたいからするもの、という当たり前の事を気づかされた<sup>107</sup>。

…生徒達は見かけによらずしっかり勉強していました。自由な面があるからこそ満足に授業を受けられるんだなと思いました<sup>108</sup>。

カナダの中学生はゆとりがあった。自分たちのやるべきことを知っていて、色んな事をやらされているのではなく、自然にやっているって感じだった。周りの大人も監視とか強制するのではなく、そばに居るって感じだった。中学生は自分たちのやりたいことの時間をたくさん持っていた<sup>109</sup>。

まさに異文化と接することによっておこる衝撃であり、それとともに生徒の中には「新たな視点」が生まれることになるのである。日本的基準からすれば、授業中の態度は「全くだらしのない」格好であるが、生徒たちが進んで勉強しているという授業態度を発見したのである。「日本的常識」では悪いとされる状態にもかかわらず、カナダではそのような状態で授業が立派に機能しているのを知ったのである。

#### (4) 自由な昼食

昼食に関しても、世田谷の中学生たちは、食べる時間から始まり中身に至るまで、あまりの違いがあるのに驚き、次のように述べている。

まず始めに驚いたことは、昼食の時間が約1時間もあるということ

---

107 同上，40 ページ。

108 同上，38 ページ。

109 同上，20 ページ。



です。そのため生徒の中には、一度家に戻って昼食を食べる人もいれば、近くのお店でパンなどを買って食べている生徒もいました。みんな自分の好きな物を食べていたけれど、私は栄養のバランスがとれていない気がしました。私達の学校は給食が出るので、それを食べていればいいのですが、メニューを考えてくれた人、作ってくれた人のおかげで、バランスのとれた食事をする事ができることをとてもありがたく思いました<sup>110</sup>。

お昼休みは結構長く、お弁当の人は体育館で食べていた。体育館の一部にテーブルが並び食堂になっていた。家に帰る人もいた。学校の中にはいつでも利用できるジュースとお菓子の自動販売機もあった<sup>111</sup>。

カナダの人の間食はとにかくすごかった。まず、学校でおかしを食べるというのはあたり前のようだった。この点がまず明らかに日本と違う。またGB校内におかしの自動販売機もあった<sup>112</sup>。

長い昼食の時間があるので、家に帰って食べても良いし、食堂で食べても良いし、体育館でも良い。給食がないので、お弁当でも良いし、パンを買って食べても良いし、スナック菓子でも良い。要するに、「好きな物」を「好きな所」で「好きなだけ」食べても良いのである。

このように、日本では考えられない余りにも自由な状況を目の前になると、「みんな自分の好きな物を食べていたけれど、私は栄養のバランスがとれていない気がしました」との思いに至るのである。そして、さらには日本の給食システムに関して、「バランスのとれた食事をする事ができることをとてもありがたく思いました。」と客観的に見る事ができ、同時に

---

110 同上, 28 ページ。

111 同上, 20 ページ。

112 同上, 29 ページ。

「メニューを考えてくれた人，作ってくれた人のおかげ」であると感謝の気持ちを抱くようになっている。

#### (5) 自由な放課後

日本では授業が終わると，部活動という集団による活動が行われるのが普通である。ところが，世田谷の中学生たちが観察したゼネラル・ビング校の様子は次のようなものであった。

「部活(club)」は，日本の方が多い。私がカナダの学校に実際に通って気付いたことだが，クラブ的な活動はあっても，趣味のような感じで，日本の学校のようにきちんとした部活動は無かった<sup>113</sup>。

日本でいう部活というものはなく，思い思いの放課後遊びをするという感じだった。もう外は寒かったが，学校の中はどこも暖かくて，半袖の人もいた<sup>114</sup>。

日本の部活動に比べると，「趣味のような感じ」で，「思い思いの放課後遊びをするという感じ」だと述べられているように，とても比べ物にはならないと受け取ったようである。日本では，集団の中で行動できる人間を作り出すことに価値を置き，集団で技を磨き上達して，大会にでて優勝することを目的としているが，ゼネラル・ビング校の放課後には一切そのような雰囲気は存在しない。世田谷の生徒たちの観察には，そのような点に関しては明確には意識されてはいないものの，明らかに二つの社会の根本的は違いを感じとっている。

#### (6) 花笠音頭のインパクト

世田谷の生徒たちは，交流の一環としてGB校で花笠音頭を披露する。

---

113 同上，21 ページ。

114 同上，20 ページ。

花笠音頭は32校の混成部隊が、時間とエネルギーを割いて練習した催し物である。自分たちの手作りの花笠も、かさばるにも関わらず、ウィニペグまで運んできての披露である。その時の模様を、生徒たちは次のように伝えている。

GB校で送別集会の時に踊った花笠音頭にみんな喜んでくれました。特に笠を勢いよく回す寺内流の踊りをみんなに「もう1回見せて」と言われた時に、がんばって練習したかいたと思いました。と同時に、Canadaの人は日本の伝統などにすごく興味があるんだと思いました<sup>115</sup>。

クラスの自己紹介で折鶴を、送別集会では花笠などをやったけど、本当に拍手喝采でみんな心の底から楽しんでくれたようだった。どれも大成功で、自信が持てたしやり遂げた達成感を感じた<sup>116</sup>。



花笠音頭の披露<sup>117</sup>

115 同上，44 ページ。

116 同上，40 ページ。

117 同上，12 ページより。

花笠という変わった形の帽子が珍しかったのか、あるいは集団での踊りが目新しかったのかは分からないが、とにかくゼネラル・ビング校の生徒たちのみならずホームステイの家族やパートナーたちを感激させたことは確かである。その様子を同行した職員の方は、次のように語っている。

もう自分の手で、もうほんとに家で一所懸命練習をして使ったものだから、(花笠を)手放したくないって、最初言ってたんですよ。最後、やっぱり向こうの家族がすごく感激しまして、ペアの生徒にあげたんですよ。そしたら、向こうの子たちは、それが嬉しくって、一緒に真似事をしてたらしいですね<sup>118</sup>。

世田谷の生徒たちにとって、自分たちが努力して成し遂げた事が、カナダの人々に感動を与えたという達成感と自信をもたらしたことの意味は大きい。そうして、ホストファミリーの手元に残された花笠は、繰り返し繰り返し、その時の感動を思い起こさせ、絆を強めることになろう。



お土産の花笠をかぶるパートナー<sup>119</sup>

---

118 第2回目のインタビュー。

119 前掲、『親善訪問団』、46 ページより。

#### 4. 生活を楽しむカナダ人

##### (1) 中学生も時間がタップリ

世田谷の子供たちが見て非常にうらやましいと感じたのは、カナダ人がゆとりのある生活を楽しんでいるということである。女子生徒も男子生徒も、異口同音に次のように話している。

スケジュールの詰まったせわしない日本と違い、カナダはとてもゆとりがあり快適な生活でした。家族と過ごす時間も多く、とてもうらやましく思いました。全体的に穏やかな生活を送っているのは、カナダの広大な美しい自然から生みだされるのでしょうか<sup>120</sup>。

カナダは自然も町も人もとにかくスケールがでかかった。学校の中でも、自由さ、楽しさ、時間の使い方、友人と先生とのかかわり方、また家での家族との過ごし方など、どうしてあんなにもすべてにゆとりを感じるのか、うらやましくて不思議だった<sup>121</sup>。

また、「カナダの家庭生活」を調べた女子生徒は、次のような観察をしている。

私はカナダにいた時、寝不足になった事はありませんでした。起床時間は月～金曜日が7：30頃、土・日は9：00頃で、就寝時間は9：30～10：00頃、遅くて11：00頃なので、日本と比べると早いです。シャワーは夜に入る事もあるが、朝に入るほうが多いです。

夕食は6：00頃と少し早めで、食後には必ずクッキーやデザートがでてきました。そしてカナダでは夕食を食べた後に遊びに行ったり出

---

120 同上, 23 ページ。

121 同上, 40 ページ。

掛けたりする事は普通。とてもゆとりのある生活です<sup>122</sup>。

カナダでは「寝不足になった事はありませんでした」というのは、中学生として実感した素直な気持ちだろう。日本では寝不足になるほど、時間が足りないのである。その主な理由は、部活と塾の二つである。カナダでは部活に相当するようなものもなく、塾もない。この点に関して、「日本とカナダの放課後の過ごし方の違い」を調べた生徒は、面白いことを発見している。アンケートの「自由時間」という項目に対して、日本の中学生の回答は「昼寝(夕寝)」があるが、ゼネラル・ビング校の生徒の回答には昼寝(夕寝)は皆無だった<sup>123</sup>。つまり、日本の中学生は、夜遅くまで塾や勉強をしなければならないので、途中で昼寝か夕寝をしなければ体がもたないということであろう。これだけでも、カナダの中学生がうらやましく思われるのは無理のないことである。

## (2) タップリの時間の過ごし方

中学生のみならず、大人の場合もカナダには時間がたっぷりとある。何しろ、既に触れたように、家族そろって食事をするのが毎日できるのである。生徒たちに同行していった職員の方も、半ば驚き半ばうらやましそうに話してくれたのは、「4時前後には仕事が終わりで、ちょうど帰宅ラッシュになるんですね。そして、車が混んでるんですね。生徒たちもうらやましいと言ったのは、お父さんもユックリ夜ご飯を一緒に食べるんですって。」と仰ることであつた<sup>124</sup>。

世田谷の中学生が滞在した9月の中旬は、まだ夏時間の間なので、5時と言えばまだまだ明るい。日が沈み暗くなってくるのは9時過ぎなので、それまでタップリと時間がある。

---

122 同上, 23 ページ。

123 同上, 21 ページ。

124 第2回目のインタビュー。

このように、子供も大人も時間があるので、普通の日でも家族そろって夕食を取り、食後のデザートを楽しみ、それから緑の多い近くの公園にでも散歩にでかけることができる。あるいは、庭でバーベキューをしたり、知人や友人を呼んでパーティをしたりビデオを観たりすることもできる。そして、週末には別荘に行き、ボートやヨットに乗り、自然を楽しむこともできる。時間に追われている社会から来ると、同じ人間の社会でも全く異なった生き方をしている人々が居ることに気付くのである。そこには、自分たちの人生の主役は自分自身であり、生活を楽しんでいる人々が居ることを知るのである。

## 5. 生徒たちの見たウィニペグ

### (1) 地平線の都市ウィニペグ

世田谷の生徒たちがウィニペグに着く前には、バンクーバーやロッキー山脈を見ており、カナダの町並みや大きな自然にも触れている。しかし、ウィニペグはカナダ中央の大平原地帯という東京とは対照的な場所にある。東京の街がカナダからの生徒には珍しく映ったのと同様に、ウィニペグも世田谷からの中学生にとっては驚きの空間である。東京とは異なる様々な面が目に入ってくるが、生徒たちの目に入った光景が次のような言葉で表現されている。

とうとう着いたウィニペグ空港は、小さい感じがしたけど、目に入る景色も人もみんな大きかった。なんだかそれが、カナダだあ、カナダに来たぞ！って感じがした<sup>125</sup>。

Winnipeg はとにかく緑が多く、空気が澄んでいた。東京と違って高いビルなんかないから空もとても広かった。その景色はもう最

---

125 前掲、『親善訪問団』、40 ページ。



生徒たちが見たウィニペグ<sup>126</sup>

高!!<sup>127</sup>

目の届く限り水平線が広がっている地形は、今までに見たこともない景色である。その光景を、ある生徒は次のように表現している。

ウィニペグは山も谷もない真っ平らな所でした。周りを見渡すとずっと地平線が続いているのです。僕はその景色に感動しました。またその景色を見た時、初めて世界の大きさを実感しました<sup>128</sup>。

トウモロコシ畑からの景色も別世界であり、言葉で表現できない光景を体験するのである。

僕の一番印象に残った事はトウモロコシ迷路で荷馬車に乗った事です。荷馬車に乗りながら見た景色はまさにウィニペグの景色そのもの

---

126 同上，22 ページより。

127 同上，43 ページ。

128 同上，38 ページ。



で、とても雄大な田舎の風景でした。とにかく言葉では言い表せないぐらいの感激でした<sup>129</sup>。

このように今までにない光景に出くわし感動を覚えることは、生徒たちに日常生活では決して考えないような哲学的な事をも考えさせるようだ。同行の担当職員の方は次のように語ってくれた。

世田谷の子供たちは、ウィニペグに入る前には、バンクーバーに行つて、バンフに行つて、そこからカナディアン・ロッキーに行くんですね。そしてウィニペグなんですけど、一人の生徒の感想なんですけど、なかなかウマイことを言うなーと思ったのが、例えば、日本のこの高層ビル、カナディアン・ロッキーの山、そしてウィニペグの真っ平らな土地、それが全て地球上にあるのが、不思議だって<sup>130</sup>。

東京の世田谷、渋谷あたりと比べれば、まさに異空間である。東京では、視界が人と建物に遮られ、上を見上げて高層ビルの間から空は少ししか見えない。ウィニペグでは、視界を遮る群衆も居なければ、目の届く限りの水平線である。マニトバ州の州都とは言え、東京と比べれば閑散としていると言っても良いだろう。世田谷の中学生にとっては、今までに見たこともない光景であり、想像も出来ない光景である。そして、一所懸命に写真のシャッターを押すことになるのである。同行した担当職員の方も、何度も何度も「ほんとうに真っ平らだったんですよ」と、今も信じられないといった様子で、その時の感覚を語ってくれた。そして、「私がステイした所が、ゼネラル・ビィングの先生のお宅なんですけど、その先生が一番遠いのかな。そのお宅のすぐ傍が、自然保護公園になっているんですね。ちょうど、その時期に渡り鳥が飛んできて、冬の始まりの時期だったんですよ。」

---

129 同上。

130 第2回目のインタビュー。

と、まさに異空間の中でのホームステイの有様を話してくれたのである。

## (2) 街の様子

さてウィニペグの街の中の様子も、東京とは大違い。世田谷の中学生たちを驚かせるものばかりである。生徒たちが何を見ているか、そして何に驚いているかは、次の表現からも明らかである。

車に乗った時にまず左ハンドルで右の道路を走るのにびっくりしました。慣れるまでは少し怖かったです。車から見た景色、道路の広さと遠くまで見える大地。比べものにならない緑の多さに感動しました<sup>131</sup>。

車は3列ゆったり走れ右側通行で、まったく渋滞はないから、どこに行くにも車で、信号もほとんどなかった。Dadの車のスピードメーターは240 kmまであって、120 kmだしてもあまり速く感じなかった<sup>132</sup>。

そして、広大な空間を移動するには、車は不可欠であり、「15歳から免許をとる事ができる」社会であると知るのである。実際、パートナーの姉の運転する車に乗せてもらった生徒は、「Janeは17歳なのに運転がとてもうまく慣れていました。日本では考えられない事なので驚きました。」と語っている<sup>133</sup>。

さらに街の中を詳しく観察した生徒は、次のような違いに気がついている。

---

131 前掲、『親善訪問団』、44 ページ。

132 同上、40 ページ。

133 同上、23 ページ。

マクドナルドのマークにはメイプルリーフがついていた。ウェンディーズもセブンイレブンもあったけど、コンビニはあちこちにある感じはなく、町に自販機もなく、列車は貨物列車ばかり見た<sup>134</sup>。

世田谷区の生徒たちは一人ひとり研究テーマを持ってきていることについては既に触れた通りである。「環境問題やゴミの問題」をテーマに選んだ生徒たちは、次のようにかなり細かい観察をしている。

リサイクルできるものと、それ以外のゴミとに分ける。どこの家でもきちんと庭先に出していて、動物にあらされていることはなかった。街のにぎやかな所には、あちらこちらに同じデザインのゴミ箱が設置してある。そのゴミ箱には「TAKE PRIDE WINNIPEG INLAND TRUSUT」とかかかれていた。「TAKE PRIDE WINNIPEG」は、ウィニペグ全体を美化することを担当している政府の一機関である。「IN-



銀行名が右側に書かれたゴミ箱<sup>135</sup>

134 同上，40 ページ。

135 同上，26 ページより。

LAND TRUST」は、美化活動のスポンサーとなっている銀行である。

住宅地や学校の周辺には多少ゴミが落ちていた。街の中心部でのポイ捨ては、東京の繁華街に比べるとはるかに少ない。

ゴミをきちんと分別して出していることや街のポイ捨ての少なさなどから、カナダ人は日本人より環境問題への意識が高いことが分かった。日本人はもっと環境問題への意識を高めるべきだと思う。

ウィニペグには美化を担当する政府の機関があると知り、日本にはそのような機関が存在するのかを調べようと思った<sup>136</sup>。

このように、日本の街では見られない側面をよく観察している。民間の銀行が環境および美化活動のスポンサーになっている事実を知るとは、この生徒の頭の中にある環境問題への取り組み方と解決方法に関して、新たな発想が加わるということの意味している。また環境問題に関心のある別の生徒は、次のような観察をしている。

ウィニペグはとても広大な所で、山ひとつなく地平線がずっと続いているすばらしい自然がある所でした。そのようなウィニペグがあるカナダは、とても自然を大切にしている国です。そんなカナダで一番最初に気づいた事は、街で売っているものに無駄な包装のない事でした。また無駄な包装が少ないカナダのスーパーマーケットや市場では、包装されているものが少なくバラバラで売られているので、ゴミも減り、好きな数だけ買えるという利点がありました。僕は過剰な包装をしても中身は変わらないんだから、そのままでもいいのにと思いました<sup>137</sup>。

---

136 同上。

137 同上，18 ページ。

その他にも、タイヤは「タイヤのリサイクルショップ」に持っていき、不要になった機械類もメーカーが介在して使える部品の再利用をしているなど、カナダ的な側面も調べている。また、カナダ人の中にも「リサイクルできるゴミをめんどくさがってリサイクルしない人もいる」と言う話も聞いている。さらに、意外な点として、「ウィニペグは雨が多く水が豊富にあるので人々は節水を気に掛けない」ということを挙げているが、汚れた水は「処理場で飲めるくらい綺麗にして川や湖に流している」ことも聞き出している。こうして、「カナダ人の中にも面倒くさがり屋」が居ることを知ると同時に、「ウィニペグの人達の環境への意識はとても高いことを実感しました」という結論に達している<sup>138</sup>。

## 6. ホームステイでのコミュニケーション

やはり英語でのコミュニケーションは、日本語のようにはいかない。最初は何を話されているのか全然分からないような状況から始まる。聞き取れないし、思っていることも表現できない。しかし、世田谷の生徒たちは、そのような状況を乗り越え、分かり合おうと必死の努力をしている。そのような中で特徴的なのは、いつも付き添って面倒をみってくれるパートナーであり、そのパートナーの存在は大きい。

### (1) 日本へ興味関心をもつパートナーの存在

パートナーの日本や日本語への関心は非常に高い。空港で初めて出会った時、出迎えのパートナーの口から日本語の挨拶が出てくるなんて予期しないことである。その模様を、ある生徒は次のように述べている。

目の前に「shunsuke!」というプラカードが見えた。僕はとっさにそこへ走っていった。そして僕のホストファミリー、「Thomas」らし

---

138 同上。

き人と目が合った。僕は、「Hello. My name is Shunsuke. Are you Thomas?」と聞いてみた。すると彼はこう言った。「ワタシノナマエハトーマスデス。ハジメマシテ。」聞き終わった瞬間、全ての緊張がふつとんだ<sup>139</sup>。

ここには日本語を覚えようとする意欲と、一所懸命に日本語の挨拶を暗記して、日本からの生徒に喜んでもらいたいという歓迎の気持ちが現れている。

さらに、世田谷の生徒たちのパートナーの中には、習いたての日本語を日常生活の中で口にして覚えようという者もいる。何人かの生徒がその様子を、次のように伝えている。

ギャレットは日本語、僕は英語に興味があって、互いに質問し教え合い、楽しくてたいへん勉強になりました。また、食事の時はいつも「いただきます。」と一緒に言って食べたのがとても楽しく、日本を少し知ってもらえたのが良かったです<sup>140</sup>。

Winnipeg での1日はとても早く感じられた。それほど毎日が楽しく充実していた。Amy は私が日本語を教えるとその言葉をよく使っていた。覚えた日本語を色々な人に言っている Amy は、なんだか可愛かった<sup>141</sup>。

また、カナダのメンバーと日本のメンバーで行った「Dark Zone」や「とうもろこし迷路」は最高に盛り上がり、Alisha 達は「行きましよう！」などと覚えたての日本語を連発して私達を楽しませてくれ

---

139 同上, 39 ページ。

140 同上, 50 ページ。

141 同上, 43 ページ。

た<sup>142</sup>。

このように、教わった日本語を使いたくて仕方がないというパートナーの様子伝わってくる。また、英語には「いただきます」に相当する表現はないが、食事の度にカナダ人の子供が「いただきます」と言っている様子を想像すると、思わず微笑んでしまう。今度、日本に行った時には、必ず使おうと思って練習しているのかも知れないが、日本に対する親近感と興味関心の強さが現れている。そして、このような日本に対する強い関心があるパートナーが傍に居ることにより、そしてこのパートナーを相手にすることにより、世田谷の生徒たちは「分かり合う」という事を実践し、その意味を実感していくのである。

## (2) 分かり合おうとすること

このいつも傍にいてくれるパートナーを相手にして、そしてホームステ



パートナー全員集合<sup>143</sup>

142 同上, 48 ページ。

143 同上, 12 ページより。

イの家族を相手にして、世田谷の生徒たちは、「伝えよう」「分かり合おう」という様々な努力をしていくことになる。

#### A. 伝えようとする体験

次のように英単語を並べて、とにかく伝えようとすることは、生徒たちの誰もが経験することである。

Brian の家に向かう途中、何度か Brian に話しかけられた。その内容は、僕のプロフィールの事だった。僕は今まで習った片言の単語で答え、なんとか自分の事は分かってもらえたような気がした。次に家族の事について紹介しようと思い、自分のトランクからちょっとしたアルバムを見せ、またもや片言の英語で Brian や家族のみんなに伝えた。家族のみんなは理解してくれて、僕の家族の事を「Good family」と、何もかも知っていたかのように笑顔で言ってくれた。僕はうれしかった。そして少し恥ずかしかった<sup>144</sup>。

食事の時、ホストファミリーの方が私の家族のことを聞いてきた。プリクラを見せながら英語を、単語を並べながら身ぶり手ぶりで話した。そうしたらすごく会話がはずみ仲良くなれた。楽しくて、食事が終わっても会話は続いた<sup>145</sup>。

でも自分の言いたいことがうまく伝わらない時だってあった。うまく言えない自分が悔しかった。それでも私の言いたいことを理解しようと一生懸命話を聞いてくれた人達がいた。ジェスチャーや単語を並べて必死になって説明し、伝わった時は自分だけでなく、聞いてくれ

---

144 同上, 46 ページ。

145 同上, 49 ページ。



ていた人達も一緒になって喜んだ<sup>146</sup>。

おそらく生まれてからそれまで、こんな風に分かり合うということに対して全身全霊で努力をしたことはなかったことだろう。日本の中では、ちょっと言ってみて相手が分かってくれないと、「もういいわ」とか「別にー」とか、あるいは「いやー、何でもない」などと言って済ませていたところであろう。それで通ってしまうのである。カナダでは、そんな風に逃げるわけにはいかない。切羽詰まった状況の中で、必死になって伝える努力をする以外にないのだ。日本でそんな事をする、もがいている「格好悪い自分」の姿が恥ずかしいし、他人の目が気になって「みっともない事」は、とてもできないのである。しかし、異文化カナダの中で形振り構わず必死になることにより、初めて「伝わるという感触」を経験するのである。

#### B. 分かろうとする相手の態度

世田谷の生徒たちは、伝えるために必死になっている自分たちを認識している。それと同時に、分かり合うには、ホストファミリーの人たちも懸命になって分かろうとしてくれていることを認識するのである。このことに関して、生徒たちは次のように観察している。

ホストファミリーの Hunt 家の人達はとても優しく、楽しい人達ばかりでした。時々、自分の言いたい事がすべて伝わらない事もあったけど、Hunt 家の人達は一生懸命理解しようとしてくれたので、何も心配する事はありませんでした<sup>147</sup>。

Amy は趣味で swimming をやっている。週3回に朝練を5:30か

---

146 同上, 47 ページ。

147 同上, 38 ページ。

らやっていて、朝からつかれていた時、Amyに「Are you OK?」と聞くとAmyは白目をむいて倒れるフリをして私を笑わせてくれた。私達は少しずつだったけど、とてもいいパートナーになっていった。Amyは私のぎこちない英語を笑顔で一生懸命聞いてくれたし、私も一生懸命Amyの話を理解した<sup>148</sup>。

Kelseyはいつも私のことを気遣ってくれた。私がうまく言葉を聞き取れなかったときも、簡単な単語に直してゆっくり話してくれたり、身の回りの生活のこともいろいろ面倒をみてくれたりして、本当に優しい子だった<sup>149</sup>。

フランチャック家のみんなの話し方がとても優しかったのだ。ゆっくり話そうとしてくれたし、それに何より、英和辞典を持っていてくれたことが嬉しかった。もしかしたら、それを持っているのは当たり前かもしれないが、ソーニャの辞書を引く、私に語りかける声は、私を微笑ませた<sup>150</sup>。

これらは世田谷の生徒たちにとって、全く初めての経験であろう。「ぎこちない言葉」を一所懸命聞き、「簡単な単語に直してゆっくり話す」ことなど、日本では経験したこともないことである。そして、世田谷の生徒が英和辞典を持っているのは普通のことなのだが、何とパートナーのソーニャ自身が英和辞典を持っていてくれたのである。この事実だけで、もう何も言わなくても相手側の熱意が十分に伝わってくる。

---

148 同上, 43 ページ。

149 同上, 36 ページ。

150 同上, 35 ページ。

C. もっと英語を

生徒の多くは英語を使ってコミュニケーションをするということの意味を初めて理解することになる。英単語をならべたり電子辞書を使うことにより、何とかコミュニケーションはできるものの、普通の会話となると、とても付いていけない。その様子を、生徒たちは次のように現している。

学校ではみんな“Hi!”と声をかけてくれて、私の難しい名前も一生懸命覚えようとしてくれた。しかし、いざ話かけられるとスピードの速いこと! せっかく話しかけてくれていても簡単な文章でもスピードに追いつけなくて聞き取れなかった。

そんなときに私の電子辞書が役立った。相手に伝えたい単語を入力すれば、だいたい言いたいことの主旨は伝わる。変な言葉を調べあつて覚えたりするのがおかしくて、辞書は遊び道具にもなった。でもだんだんとコミュニケーションがとれるようになるにつれて辞書に頼っている自分が悔しくなってきた。「自分の言葉で伝えたい」そう思って少しでも頼らないように努力した<sup>151</sup>。

「うまくやっていけるかな?」という不安があったけれど、車での移動中、常に話題を作ってくれたり、面白い事を言ったり、と今までの不安をすぐに忘れさせてくれた。そんな家族のみんなに伝えようと、僕も辞書を手に苦労しながらも会話をすることができた。「もっと英語の勉強をしてくれば…。」この時もそうだったけど、ウィニペグにいる間、そう思う事は何度もあった。だから、カナダの人達が来る3月にはもっと英語を上手くなってやる!<sup>152</sup>

ぼくはカナダに行って、もっと英語がしゃべりたい、もっと英語を

---

151 同上, 36 ページ。

152 同上, 37 ページ。

リスニングできるようになりたい、だから初めて、もっと英語を知りたいと思った<sup>153</sup>。

そんな楽しい日々を過ごしているうちに、あつという間に別れなければいけない日になってしまいました。自分がどれだけ楽しい思いをしたか言いたかったけれど、自分の英語力がないためうまく言えず悔しく思いました。だからこれからはもっと英語力をつけたいです<sup>154</sup>。

英語が必要な環境に身を置いてみて、初めて頭ではなくて体全体で英語でコミュニケーションをするという意味をつかむことになるのである。日本の中では、決してこのように「英語力をつけたい」という強烈な願望は生まれなかつただろう。カナダという異文化の中に身をおき、ホストファミリーの人々が目の前に居ることにより、生徒たちが自ら「自分の思いを表現したい」、「相手の言っている事を分かりたい」という気持ちになるのである。

### (3) 言葉を越えて

生徒たちが英語での意思疎通に格闘している様子は既に触れた通りであるが、言葉以外にも様々なやり取りがなされている。手を動かす、体を動かして、同じ事柄を経験することにより、心理的距離を縮めていくのである。

#### A. スポーツを共に

男子生徒たちは、バスケットボールやスケートなどをしながら親しくなっていくことが多い。何人かの生徒が、その様子を次のように述べている。

---

153 同上, 40 ページ。

154 同上, 38 ページ。

正直少し疲れていたけど、Ryan や Ryan の友達とバスケットボールをしているうちに、楽しくて疲れなんかすぐ感じなくなりました<sup>155</sup>。

…、僕達は、毎朝バスケットボールの練習をしました。下手な僕をギャレットは優しく教えてくれ、僕は少し上手になり、同時に僕達はどんどん仲良くなっていきました<sup>156</sup>。

みんなと過ごした一日一日が、僕にとっては最高の「思い出」だったが、中でも彼と一緒に過ごした中で一番楽しかったのは、アイススケートをやった時だ。何度か転んだ僕の元にすぐにかけてくれた時、僕は「ありがとう。」と心の中で何度も何度も言っていた。あの時のことがいい思い出として残っている。彼のおかげで、彼ほどうまくはないけれど、滑れるようになったことにとても感激している<sup>157</sup>。



アイススケートとともに<sup>158</sup>

---

155 同上。

156 同上，50 ページ。

157 同上，46 ページ。

158 同上，11 ページより。

また男子の中には、「震える気温の中で湖に飛び込み」お互いの勇気を試し合うといった悪戯をして親しくなることもある<sup>159</sup>。

女子生徒の中には男子のようにバスケットボールやスケートなどをした者は居ないが、一緒にボーリングに行き「私とソーニャはあまり良い記録は出せなかったがちょっと倒しただけでも盛り上がってくれて、とても嬉しかった。」と述べている者もいる<sup>160</sup>。

## B. 音楽を共に

女生徒たちは、音楽が共通の言葉となり、一体感を得ることが多いようだ。その様子を女生徒たちは、次のように語っている。

空港から学校まで移動中、私が少しでも話そうとすると、わざわざラジオを消してくれて、とても気を使ってくれた。また、ラジオでコリー・ハートの曲が流れた。前にメールで彼の話をしていたので、とても盛り上がった<sup>161</sup>。

この時も、観光の時も、いつもビオンセのクレイジー・イン・ラブが流れていて、この曲は私の思い出の曲になった。音楽の話題や、(ボウリングの)点数の笑い話などで盛り上がったのでちょっと仲良くなれたと思った<sup>162</sup>。

Jenica がパソコンで音楽を流して踊りだした。「Together.」と言われ、私も一緒に踊った。どうやら踊るのが好きらしい。一緒に歌も歌った。チューリップを教えてあげた。手話付きで赤鼻のトナカイを歌っ

---

159 同上, 37 ページ。

160 同上, 35 ページ。

161 同上。

162 同上。

たら、英語と一緒に歌ってくれた。日本語の歌詞と手話も少し覚えてくれた<sup>163</sup>。

メールのやりとりで好きな歌手の話をしているような場合には、もうその歌手の歌が流れてくるだけで「共通の世界」ができてしまう。また、歌に合わせて一緒に踊ったり、手話付きで赤鼻のトナカイを英語と一緒に歌えば、頭ではなく体全体で「一緒の世界」に居る感覚を味わうことができるのである。

### C. 遊びを共に

折り紙やあやとりのように、目に見える形が作り出す伝統的な日本の遊びも、言葉を越えることができる。その様子を、生徒たちは次のように述べている。

たまには家の中できれいな和紙を使い折り紙を折って、日本の伝統的な遊びを紹介する事で、みんなを喜ばせる事ができました<sup>164</sup>。

お土産をあげたらすごく喜んでくれた。私は日本のおもちゃやくす玉、自分で作った湯のみなどをあげた。私と Jenica と弟と姉で日本のおもちゃで遊んだ。あやとりは私より Jenicaの方が上手だった<sup>165</sup>。

また現代版のおもちゃでは、サンリオのキャラクターも文化を越える存在になっているようである。この点について、ある女子生徒は次のように話している。

---

163 同上, 49 ページ。

164 同上, 38 ページ。

165 同上, 49 ページ。

GB校の友達の友達も私に優しく接してくれた。Alishaの家で遊んだ時やサンリオのキャラクターの話で盛り上がっている時は日本の友達といる時よりも楽しくて、カナダの子と仲良くなれたのが何よりも嬉しかった<sup>166</sup>。

#### D. 笑いを共に

手を使い指を使って同じことをする過程で、お互いの心理的距離が縮まり共感が生まれるが、同じ事に笑えるようになれば最高の関係であろう。箸が転がっても可笑しいという年頃のせいかも知れないが、女生徒たちの中には次のように笑える関係を作りだした者も居る。

Kelseyが家に友達を呼んでパーティーを開いた。音楽を聴いたり、みんなで話をしたりして本当に楽しかった。一番笑ったのはチキンバーガーの振りローマ字がchikanになっていたことを発見して意味を教えてあげたとき。みんな一斉に笑いころげた<sup>167</sup>。

また、カナダのメンバーと日本のメンバーで行った「Dark Zone」や「とうもろこし迷路」は最高に盛り上がり、Alisha達は「行きましよう！」などと覚えたての日本語を連発して私達を楽しませてくれた。特にSchool Busや皆でPartyをした時はお腹が痛くなるまで笑って、はしゃいで、最高の友達になれた<sup>168</sup>。

上のように、チキンバーガーがチカンバーガーになっていると知ったら、誰もが笑いこけることだろう。しかし、それも電子辞書のお陰、ハイテクのお陰なのである。この女子生徒はいつも電子辞書を活用していたので、

---

166 同上, 48 ページ。

167 同上, 36 ページ。

168 同上, 48 ページ。



みんなの目の前で和英辞典に“chikan”をインプットし、ディスプレイに現れた英語の意味を見せれば、一同大笑いになるのである。また、Alishaが「行きましょう」と習いたての日本語を連発する様子も可笑しいし、「とうもろこし迷路」を体験した後では、バスの中でもパーティの時でも、ちょっとした事でも大笑いになった様子が伝わってくる。まさに「笑って、はしゃいで、最高の友達」である。

#### (4) 伝わらない溝を越えて

世田谷の生徒の中には、パートナーの生徒とのコミュニケーションがうまく行かなかった者もいる。

##### A. 氷を割る努力

一般的に、カナダ人が他人に対して言葉をかけることは珍しいことではないが、そうではない場合もあるようだ。次の例のように、対話が不可能な場合もあるようである。女子生徒の一人は、その模様を次のように話している。

最初の頃、Natashaとはほとんど話すことができなかった。みんなが工場見学や表敬訪問に行く時も、Natashaはどんどん先へ行ってしまった。周りを見るとみんなはホストと楽しそうに歩いていた。わたしはとてもあせった。「どうしたらいいんだろう」と情けない気持ちになった。でも落ち着いて考えた。「他の人と比べたらいけない。自分のペースでやればいいんだ。そして絶対Natashaと仲良くなろう。」

その日からなるべくNatashaに話しかけるように努力した。Natashaと仲良くなりたいの一心だった。折り紙を教えてあげたり、あやとりをやったり、「アルプス一万尺」をやったり、トランプをやったりした。少しずつだけどNatashaとうちとけていくことができた。そしてある日、Momが「みどりが帰ったらさみしいよ。」と言ってくれた。Natashaも「わたしもさみしい。」と言ってくれたのだ。そんなふうに

思ってくれていたんだと思うと、うれしい気持ちでいっぱいになった<sup>169</sup>。

原因は不明であり、「周りを見るとみんなはホストと楽しそうに歩いていた」のであるから、「情けない気持ち」になって当然である。問題は、Natasha がシャイだったせい、あるいは、ちょっとしたボタンの掛け違いから生じたせい、それは不明である。いずれにせよ、「他の人と比べたらいけない。自分のペースでやればいいんだ。そして絶対 Natasha と仲良くなるう。」と考え、そのような行動を取っていったのは適切な解決方法である。言葉だけではなく、「折り紙」を教え、「あやとり」をし、「アルプス一万尺」をし、トランプをするなど、「言葉以外の方法」で積極的に働きかけていたのである。その結果、「みどりが帰ったらさみしいよ。」と言ってくれるような関係になったのである。この生徒にとっては、自分の知恵と努力で問題を解決することにより、友達を得ることができ、そして何よりも大きな自信を得ることができたと言える。

#### B. 仲間に入れない

パートナーの生徒が友達と話をしている時に、世田谷の生徒は英語での話に加われない。その時の状況を、ある女子生徒は次のように話している。

学校に行く日も数日あって、登校の時や授業中の友達との会話に加われなくて淋しかった。きっとソーニャには悪気はないんだろうが、何回か無視されて、少し泣いたり、くじけた。今思えば、私は弱かった。これからはポジティブな、前向きで明るい人間になろう<sup>170</sup>。

この生徒が言っているように、相手に「悪気はなかった」のだろう。そ

---

169 同上, 45 ページ。

170 同上, 35 ページ。

して、このような状況は日本でも起こりうるが、場所が異国の土地であっただけに感じ方も増幅されたのであろう。しかし、「今思えば、私は弱かった。これからはポジティブな、前向きで明るい人間になろう。」とやっているように、この経験を生かして適切な解決策に至っている。

さて、この事と全く正反対の事が起こることがあるし、実際に起こっている。世田谷の生徒たちが日本語で話し、カナダ人のパートナーが日本語の話しのできる輪に入れないという状況である。その時の様子を、別の女子生徒は次のように話している。

Winnipeg に来てから9日がたった日、私は Amy の変化に気付いた。何だかいつもより Amy の態度が冷たかった。私は理由がわからず、考えていた。そしてある事に気付いた。私が世田谷の友達と話している時、隣で Amy が悲しそうな顔をしていた事。私はその時気付いた。Amy は日本語がわからないから、私達が何を話しているか気にしている。私は Amy にすごく失礼な事をしたと思った。そして私はその時から世田谷の友達と話したことを Amy にも話した。すると Amy はうれしそうに聞いていた。ごめんね、Amy …<sup>171</sup>。

この場合も、非常に適切な方法が取られている。「私は Amy にすごく失礼な事をしたと思った。そして私はその時から世田谷の友達と話したことを Amy にも話した。」とやっているように、何が問題なのかが分かり、言葉ではっきりとパートナーの Amy に説明しているのは、素晴らしい解決方法である。

以上のような事から、これらの女子生徒たちは、「言葉が分からない者がいる場合には、仲間外れにならないような配慮」をすることであろう。日本人同士が日本語で話をしている所にカナダ人が加われば、翻訳してあげるとか、場合によれば日本人同士が英語に切り替えて話をするというよう

---

171 同上, 43 ページ。

な方法もとることであろう。

## 7. 涙の別れ

12日間ではあるが、異文化カナダの中でホストファミリーと共に過ごした影響は大きい。日本に帰る日が近づいてくるにしたがって、世田谷の生徒たちは「日本には帰りたくない、もっとカナダに居たい」と思うようになる。その時の生徒たちの思いは、ホームステイがどのような意味があったのかを如実に物語っている。

### (1) 帰りたくない

男子生徒も女子生徒も、生徒たちは一様に、帰国間近の様子を次のように述べている。

みんなとだんだん仲良くなるにつれて日本へ帰る日も近づいてくる。そして、その日が近づくにつれて Kelsey は私に “I miss you.” と言ってくるのだ。そのたびに私は少し寂しい気持ちになった。「まだここにいたい、帰りたくない」という気持ちがその時が近づくにつれて強くなる…

別れの日の前夜、Kelsey とそれまでで一番話が盛り上がった。しばらく Kelsey と会えなくなると思うと自然と口から言葉が出てくる<sup>172</sup>。

一日一日が本当に楽しく、僕は「帰りたくない、カナダにずっといたい。」と夢のようなことをずっと言っていた<sup>173</sup>。

そして前日までずっと Brian と仲良く遊んでいた僕らに、お母さん

---

172 同上, 36 ページ。

173 同上, 46 ページ。

が「そろそろパッキングしなさい。」と言った。僕は「とうとう明日か」と急にゆううつになりパッキングを始めた。すると彼が無言で手伝ってくれた。最後の最後まで僕に優しくしてくれる Brian の姿を見ると涙が出そうで、僕は「トイレに行く」と言って彼をごまかした。パッキングをして30分ぐらいたった時、僕達はもうベッドに入っていた<sup>174</sup>。

そして別れの前夜、私達は Amy のアルバムを見たり、トランプなどをして遊んだ。明日の事を考えると涙が出てきそうだったから2人ではしゃいで遊んだ。そして、いつものように「Good night!」と言って部屋に行った<sup>175</sup>。

カナダ、特にウィニペグで過ごした日々はあまりにも早くすぎた。最後の夜、ホストファミリーが家でお別れ会を開いてくれた。僕はとても悲しくなってベッドの中で泣いてしまった<sup>176</sup>。

楽しい日々はあっという間に過ぎ、スウォー家の人達と過ごす時間がもうないと分かったのは、別れの前夜でした。僕はショックでした。たった2週間なのに、本当の家族のように優しく接してくれたお父さん、お母さん、ギャレット、エイドリアン、アレクサ。ギャレットとは、来年の3月にまた会えるけど、お父さんやお母さんや弟や妹とは、もう会えないかもしれない。そう思うと、寂しくて悲しくてたまらなくなりました<sup>177</sup>。

---

174 同上。

175 同上, 43 ページ。

176 同上, 39 ページ。

177 同上, 50 ページ。

別れの時が近づいてくると、ほとんどの生徒が「帰りたくない」という気持ちを抱くようになる。そして、ホストファミリーと話している最中に不意に涙が出そうになって、その場を何とか取り繕う者も居れば、感情が高まって饒舌になる者もいるのである。このようにして、いよいよ別れの日を迎えることになる。

## (2) 泣かないつもりだったのに

二週間前は緊張して降り立った空港だが、今度は涙で別れる場所となる。「笑顔で別れたい」と思っている、「絶対に泣かない」と決心している、もうこみ上げてくる涙を止める術はない。女子生徒たちは、その時の気持ちを次のように語っている。

それでも時間は待ってくれなかった。ホストファミリーや友達と別れるのが辛くて涙が止まらなかった。「最後は笑顔でいたい。」そう決めていたはずなのに、止めることができなかった。Nicoleにはまた3月に会えるけど、ホストマザー、ファーザー、お兄ちゃん、そして友達にはもう会えないと思うと辛かった。飛行機に乗り込むと隣にNicoleがいないのが淋しかった。いつも一緒に笑って、腕を組んで歩いて…。あなたがいるのがあたり前のようになっていたからかもしれない<sup>178</sup>。

別れの日。私は絶対に泣かないと自分に言いきかせた。空港でMomに「Thank you very much for every thing.」と言った時、Momは私を抱きしめてくれた。その時、我慢していた気持ちが一気にあふれ出して泣いてしまった。Momも一緒に泣いてくれた。最後のお別れセレモニーが始まるとAmyの隣でまた涙が出てきた。でもAmyは最後

---

178 同上, 47 ページ。

まで優しい笑顔でいてくれた<sup>179</sup>。

こうして、私は楽しさと喜びに浸っていた…。

そして、10月2日…。別れの日。信じられなかった。もう、12日も経ったのだろうか。もう、別れなければいけないのだろうか…。別れの前日に Sarah は “I’ll cry tomorrow.” と言った。そして、私は “I don’t want to cry.” と言って、…。私は泣かないつもりだった。しかし、できなかった。一度泣いたら、泣きやむことができなかった。

Sarah と私は、 “Bye… See you in 6 months.” と言って別れた…<sup>180</sup>。

そしてやって来た最後の日、私は空港で、大泣きしてしまった。スピーチをしなければならぬのに、辛くて喋れなくなってしまった。そんな私を助けてくれたのは Alisha だった。彼女はスピーチしている私のところに来て思いきりハグしてくれた。最後まで Alisha の優しさが心に残った。

Thank you for your kindness! Thank you for wonderful memories

また絶対 Canada に行くからね! また絶対会おうね! それまで  
Bye for now!<sup>181</sup>

お別れの時、Natasha はずっとわたしと一緒にいてくれた。この前この空港に着いたばかりではないかと、お別れが信じられなかった。Natasha は泣かないだろうと思っていたが、お別れのスピーチの時気づくと Natasha は泣いていた。Natasha と何度もハグした。わたしは Natasha と本当に仲良くなれた、ベストパートナーになれたのだと改

---

179 同上, 43 ページ。

180 同上, 41 ページ。

181 同上, 48 ページ。

めて思った。それが心の底からうれしかった<sup>182</sup>。

涙の別れは女子生徒たちだけではなかった。大泣きをした男子生徒は居なかったようであるが、その気持ちは同じであった。男子生徒たちは、その時の気持ちを次のように述べている。

次の朝いよいよ彼と別れる日になった。「日本でまた会おう。」とか「また来るよ。」とか、僕も、他の人達も口々に何度も何度も言っていた。お別れのセレモニーが終わると、次々と泣き始める人が出てきた。Brian も泣いた。僕は飛行機に乗った時「当分会えないんだ」と考えた瞬間、急に涙があふれた。そして僕は、泣いたままウィニペグから飛んでいった<sup>183</sup>。

そして、空港。ホストファミリーにもらったぼうしに僕はトーマスにサインをしてもらった。そしてそのぼうしを思いっきりふって飛行機に乗りこんだ。トーマスのサインが涙でにじんでいた<sup>184</sup>。

このような光景は、何も知らない人は恐らく信じられないかも知れない。多分、当の生徒たちも、大勢の人が居る場所で、抱き合って「こみ上げてくる涙を抑えることができない別れ」なんて、それまでの人生で一度も経験したことがなかつただろうし、そんな事になろうとは想像もできなかったに違いない。わずか二週間ではあるが、カナダ人のホストファミリーと空間を共にしたことがもたらした結果である。分かり合おう、伝え合おうとして過ごした二週間がもたらした結果なのである。そのような二週間という時間が過ぎ去った時、出会った時にはなかった「分かり合えたという

---

182 同上，45 ページ。

183 同上，46 ページ。

184 同上，39 ページ。



感情」が共有され、共に抱き合っ  
て涙をながすということになっ  
たのである。

## 8. 大いなる変化——異文化カナダでの体験がもたらしたもの

異文化カナダの中で17日間滞在したことは、世田谷区の生徒たちに非常に大きな影響をもたらしている。それでは、どのような変化が生徒に起きたのかを見ていこう。カナダに出発する前の自分と比べてみて、生徒たちは自分自身の変化したことを明確に認識している。そして、その変化は、同行して行った担当職員や生徒の親の目から見ても、はっきりと分かる変化なのである。

### (1) 達成感と自信

まずは不安で始まったホームステイをやり遂げることにより、生徒たちは達成感と自信を感じている。生徒たちの言葉を聞いてみよう。

丁度2週間前には「不安」という2文字が執拗に付き纏って離れませんでした。しかし、今となっては学校の親友にも負けない大切な友達になりました<sup>185</sup>。

この交流で私はたくさんの人と知り合うことができた。そして、かけがえのない友達となった。ホストファミリーの方とも会うことができた。始めのころは何を言われても分からなかったのに、最後には最初の時とは違うように言葉が聞こえた。言葉が違っても、コミュニケーションをとることができるなど、私は多くのことを学ぶことができた。この経験を将来に役立てたい。そしてまたこのCanadaへ来たい。Host family, 皆さんに会うために…。Thank you very much!!<sup>186</sup>

---

185 同上, 42 ページ。

186 同上, 49 ページ。

私たちは住んでいる国も文化も違う。でもこの13日間、同じ言葉で同じ時を過ごしてきた。もしかしたら私たちはつながっているのかもしれない。そう思えてきた。なんだか嬉しくて自然と笑顔がこぼれてくる…。Kelseyと過ごした日々は私にいろいろな事を教えてくれた<sup>187</sup>。

僕はこの体験で、心が強くなり、互いに知り合いたいという強い気持ちを持たば、笑顔で向き合い、眼と眼を合わせ、心の言葉で話したらきっと分かり合えるという大きな希望があることを確信しました。

I want to go to Canada again, because I have my other family there<sup>188</sup>.

「始めのころは何を言われても分からなかったのに、最後には最初の時とは違うように言葉が聞こえた」という感覚——この感覚を自ら実感するという意味は大きい。そして、「言葉が違っても、コミュニケーションをとることができる」という感覚、言葉を越えて文化を越えて「つながっている」という感覚、「分かり合える」という感覚、この感覚を自分の体で感じることにより、自信が生まれてくるのである。

## (2) 感謝の気持ち

カナダでの体験がほんとうに得難いものであるということ、そして、その体験が決して自分独りの力で成しえたものではないということ——このように生徒たちは理解している。そして、感謝の気持ちを次のように現している。

僕はホストファミリーに恵まれて幸せだと思いました。僕は、ベン

---

187 同上, 36 ページ。

188 同上, 50 ページ。

に出会えて本当に良かったと思いました。僕は今回のこの交流に携わって頂いた全ての方々に感謝します<sup>189</sup>。

今思えば、出発の10日前に腹痛に見舞われ入院までしてあきらめなければいけなかったかもしれなかったことも含め、本当に有意義な体験の日々のすべてに心から感謝の気持ちでいる。

Thank you very much!!! Love CANADA<sup>190</sup>

私は、この派遣で「友情」という大切なものを手にいれたし、「絆」という大切なものを作ることができたと思う。

この派遣に協力してくださった方々、私達に指導してくださった方々、私の仲間。この、私の大切な方々に精一杯の感謝の気持ちを伝えたい<sup>191</sup>。

僕は外国に友達を作れた事を誇りに思います。そしてこの計画を立てて僕達を支えてくださった方々に自分のできる限り、ありがとうということを伝えたいです<sup>192</sup>。

日本ではできない体験をさせてくださった方々、引率の先生方、一緒に Canada に行った仲間達。ありがとうございました<sup>193</sup>。

「今回のこの交流に携わって頂いた全ての方々に感謝します」とか、「僕達のために力をいれてくださったたくさんの方々に、心から感謝をしたい」

---

189 同上, 42 ページ。

190 同上, 40 ページ。

191 同上, 41 ページ。

192 同上, 38 ページ。

193 同上, 44 ページ。

とか、「この計画を立てて僕達を支えてくださった方々に自分のできる限り、ありがとうということを伝えたいです」とかと述べられている。この生徒たちの人生で、こんな風に謙虚に人に対してお礼の言葉を現したいと思ったことはあっただろうか？ いや、それは恐らく初めての事だったに違いない。同行して行った職員の方の言葉が、その事を如実に物語っている。

…自分たちの力じゃないんだっていうことを、すごくみんな感じたらしいんですよ。例えば、ここに行くまでには、学校の先生方も支援してくださったのを見て、子供たちは区の代表でもあり学校の代表でもあるんだって、自分の学校からは行きたくても行けなかった友達もいるんだって。そうすごく感じたのと、後、あるお母さんが仰ったのですが、男の子なんですけど、ほんとに反抗期真っ盛りで、ほとんど口もきいてくれない状態で、お母さんは寂しいと言った状態だったんですね。それが帰ってきて、区役所に迎えに来て、帰りのタクシーの中で一言「おかあさん、ありがとう」って言ってくれたのが、すごく嬉しかったって<sup>194</sup>。

今までほとんど口もきかなかった子が、母親に「ありがとう」という言葉を口にしたということ、もうこの一言で十分であろう。息子から「ありがとう」と言われた母親にしてみれば、思わず涙が出たに違いない。中学生のこの年頃の男の子に、「お母さん、ありがとう」と言わせるような出来事は、滅多にあるものではない。

### (3) 今度は僕らが歓迎する番

世田谷の生徒たちは、今まで経験したこともない素晴らしい事を経験で

---

194 第2回目のインタビュー。

きたと認識している。そして、それは自分たちを受け入れてくれたホストファミリーとそのパートナーのお陰であり、今度パートナーが日本に来た時には、同じような経験をさせてあげたいと思うのである。その思いを次のように語っている。

優しいホストファミリーと一緒に大きな自然の中で貴重な体験ができて良かったと今でも思っている。

そして、ホストファミリーをはじめ、僕達のために力をいれてくださったたくさんの方々に、心から感謝をしたい。

来年、Brianが日本に来た時には「Welcome Brian」という言葉とたくさんの優しさで迎えてあげたい<sup>195</sup>。

また、別れる時、僕は3月まで待てる気がなくてとても寂しかったです。Ryanが来た時には全力を尽くして歓迎してあげたいです<sup>196</sup>。

本当にあっという間だった。けどウィニペグで起きたことを一つ一つ僕は絶対に忘れない。そしてまだ終わったわけではない。今度は僕がトーマスを受け入れる番だ。その時、ぼうし選びは絶対迷わない!<sup>197</sup>

3月にScottが日本に来た時に、自分がしてもらって楽しかったことや、嬉しかったことをしてあげたいと思います。そして、日本のいろんな所をいっぱい見てもらい、日本について少しでも理解して欲しいと思っています<sup>198</sup>。

---

195 前掲、『親善訪問団』、46 ページ。

196 同上、38 ページ。

197 同上、39 ページ。

198 同上、44 ページ。

10月に別れて、年が明けた3月にはカナダからパートナーがやってくる。その3月が待ち遠しくて仕方がないようである。そして、「今度はぼくらが全力を尽くして歓迎する番」だという気持ちがヒシヒシと伝わってくる。生徒たちは、自分たち自身では「考えもしなかったこと、想像もしなかったこと」をも吸収してきているのである。現在の日本で、こんな風に全力をあげて歓迎するぞという気持ちにさせる事柄はあるだろうか。

#### (4) 異文化体験が子供を成長させる

自分自身の体と五感で「未知のもの」を体験するというこの意味は大きい。それを受け止め、解釈し、自らの体と五感の一部とすることにより、外から見ても「成長」したということがハッキリと目に見えて分かるようになる。生徒たちに同行して行った担当職員の方は、生徒たちの変化について次のように話してくれた。

生徒たちとは10月の終わりに会って、それで、年が明けてから受け入れの説明会を開いたんですね。その時には、もう、ほんとに半年でこんなにも大人になるんだなって。もう話す事もすごくシッカリとしてくるし、今度受け入れの時には、自分たちは今度どうしてあげたらゲストの生徒が喜ぶか、今度ホストとしてどうするかとか。例えば、滞在中にも、本当に些細な事なんですけれども、ウィニペグの生徒はやっぱり言葉が不自由なもので通じないので、やっぱり自分のペアの生徒をすごく頼りにしてしまうんですね。そうすると世田谷の生徒にしてみれば、たまには自分は一人になりたいと思っても、うっとうしく感じたりするんですよ。後で、あっ、こんな風に冷たくしちゃってと反省したり。それで、ちょっとしたことで喧嘩になってしまったりすると、私たちが動く前に、生徒がそれを察知して、すぐ動くんですよ。例えば、アッー見ていてちょっと危ないなと思うと、自分がその生徒を連れて行ってあげて、うまくやってあげるとか。先生何とかしてー、稲葉さん何とかして、じゃなくって、自分たちで解決していこ

うという態度なんですね。先生たちが入った方がイイ？ 先生に言った方がイイと確認をして、いや大丈夫だという時には、特に何もしません。長引きそうだな、難しそうだなって時には、こちらから話を入れておくんです。やはり、まだ続くようであれば話をしてねって。本当に半年でこんなに成長するんだなって、正直思いましたね<sup>199</sup>。

本当に、中学生を「半年でこんなに成長させる」教育があるだろうか？ あるとすれば、マジックである。まさに、マジックと言って良いだろう。そのマジックの「種」は、体と五感を使っての異文化体験である。もちろん、それにはこの担当職員の方のように適切なガイダンスを与えながらも、子供たちを見守って自主性を発揮させるという大人の指導は不可欠である。そして、生徒たちは「最初はチンプンカンプン」の状態から、最後の「涙の別れ」になる状態、この大きな変化を身体で認識するのである。こうして、異文化の中での関わり合いによって、自分自身が変わり、相手も変わり、「文化を越える感覚」を体感するのである。そして、今までになかった感謝の気持ちが生じ、他人に喜ぶ事をしてあげたいという思考回路ができあがるのである。

## おわりに

本論においては、世田谷区とウィニペグ市との姉妹都市関係の全体と相互作用がもたらす影響について見てきた。今それらをふり返って、そこから現れてくる重要な特徴やいくつかの指摘すべき点について触れておきたい。

まず第一に、全体的な特徴を指摘しておこう。本論で述べたように、世田谷区とウィニペグ市とは非常に対照的な都市である。その二つの都市が日系人の縁によって姉妹都市提携がなされて30年余りになる。その間、他

---

199 第2回目のインタビュー。

の姉妹都市関係では見られないような、ロイヤル・ウィニペグ・バレエ団をも含めた文化的な交流関係が見られる。そして、市民親善訪問団は世田谷からの一方的な傾向にあるが、中学生の相互派遣は30年余りにわたり継続して行われ、教育的にも非常に大きな影響をもたらしていると言える。

第二に指摘すべきは、日本側の受入家庭も、カナダ人の生徒と出会うことにより、変化しているという点である。それは、「はりきり・ガンバリ」の日本的受け入れ方から「肩のはらない」受け入れ方で良いんだという認識も現れてきているということである。食事に関しては最も気を使う事柄だが、この点に関しても変化の兆しが見られる。ある家庭のホストマザーが発見したことは、家族で居酒屋に行ってみて、カナダ人の好みがあったと言うことであった。まず、居酒屋にカナダ人の生徒を連れて行く事は、従来の「考え方の枠」から一歩踏み出すということである。さらに、居酒屋では一品ずつの料理が少量であるし、分け合って食べられるので、嫌いな物でも食べきる必要はないのである。その意味で、バイキング方式に似ていて非常にフレキシブルな方法である。本論でも触れたことだが、カナダの生徒の中にも日本料理にチャレンジしたい生徒もいる訳で、家庭料理の場合にも、「好きか嫌いかな」を試せるようなバイキング形式が有効であろう。

第三として、受け入れ側の父母の間にも変化の兆しが見られるということである。カナダ側では、父母が協力して持ち寄り形式で歓迎会などを開くということは珍しいことではないが、そのような動きが日本側にも現れてきている。カナダでホームステイをしてきた自分たちの子供が、ステイ先でどんなに世話になり、どんなに楽しい時を過ごしてきたのかは、ビデオを見れば一目瞭然である。それによって、普通は母親に任せっきりの父親もカナダの生徒たちを迎える歓迎会の準備にも参加し、受け入れ後の意見交換の会合にも参加するようになったのである。忙しい日本の父親にすれば、これは非常に大きな変化である。

第四は、担当職員の「異文化インターフェイス」の重要性についてである。異なった文化を相手にする者は、それぞれの文化には独自の物事の処



理の仕方があることを知り、「文化的翻訳作業」をすることが必要である。この点に関して、世田谷区の担当職員は的確な認識を持ち、カナダ側との連絡・調整に関わっていると言える。例えば、一般的にカナダ側はスケジュールに関しては大雑把な傾向にあるが、世田谷の担当職員の方は、「(保護者に)説明しないといけないので、この日までに回答を欲しいと、そんな風に期限をつけて言っていました」と述べているように、明確にこちら側の意図が伝わるような行動を取っている。また、カナダからの生徒を受け入れる際に、カナダ側の生徒たちは一般の日本人生徒にとっては「自分勝手」と映る場合もあるようであるが、この点に関しても、文化的な背景が異なっている事情を理解して、日本側の生徒にアドバイスを与えている。ただ、行政組織という視点からすれば、このような異文化インターフェイスを持った職員の資質とノウハウをいかに組織的に継承していくかを考えることが必要であろう。

第五として、中学生派遣プログラムの特徴が挙げられる。中学生の相互派遣は、姉妹都市関係においては、普通よく行われているプログラムである。しかし、世田谷区の場合には、二つの特徴がある。生徒たちは、全員が研究テーマをこなすということと、ホームステイにペアを組むというパートナー制度を採用していることである。研究テーマに関しては、もし適切なテーマが選ばれたとすれば、本論でも見たように生徒たちは真剣な態度でカナダ社会を観察することになるのである。但し、適切なテーマを選択するには、指導する教員の方にも「観察しやすい形」にするような関連知識と指導が必要であり、これがこれからの課題であると言えよう。また、パートナー制度は、日本での滞在中でもカナダでの滞在中でも、ペアになった一組の日本とカナダの生徒が一緒に行動するということを意味し、時として喧嘩をすることもあるが、それだけ密接な関係が生まれてきている。

第六に、世田谷区の中学生在が単純に異文化カナダに接し、異空間ウィニペグに接する影響は大である。高層ビルと人間が詰まった空間から、人がまばらで目の届く限り水平線が広がる空間への移動は、人の感覚にも影響

を与える。それは、今までに経験したことのない「日本のこの高層ビル、カナディアン・ロッキーの山、そしてウィニペグの真っ平らな土地、それが全て地球上にあるのが、不思議だっ」と言う感覚をも生み出すのである。こうして、慣れ親しんで当然のこととと思っていた「空間」に対しても、相対化が行われ、客観視するようになるのである。

第七は、カナダ社会を見て発見する「家族」のあり方である。日本では毎日家族そろって夕食をすることは珍しい事になってしまった。ところが、カナダでは毎日父親も揃って夕食を囲むのである。生徒たちは、「私が一番うらやましかったのが4:30頃にはDadが帰ってくる事です。」と言い、「僕のホストファミリーはほとんど家族全員で食事をした。塾や習い事はなく、食後も家族で映画を見たり、今日何があったかを話したりした。」とも言っている。このように家族と一緒に食事をする社会、家族と一緒に映画を見る社会に接してみて、カナダ人の家族に対する価値観を知り、同時にそのような事が可能な社会が存在することを知るのである。そして、生徒たちが羨ましがっている事からも明らかのように、日本における家族のあり方を客観的に見るようになるのである。ある女子生徒が、「カナダでは毎日家族そろって夕食を食べました。日本でもいつかそうなるといいと思います」と述べているように、彼らが大人になる時には、そのような家族を作りだしてくれるかも知れない。

第八は、日本とは全く異なった生き方があるという発見である。世田谷の生徒たちは、それを「ゆとりのある生活」という言葉で呼んでいる。その「ゆとりある生活」は、中学生の学校生活の中にも存在するし、家族との生活の中にも同様に存在するのである。「スケジュールの詰まったせわしない日本と違い、カナダはとてもゆとりがあり快適な生活でした。家族と過ごす時間も多く、とてもうらやましく思いました」という生徒の言葉に、その全てが集約されていると言ってもよいだろう。これは、人間がどのように生きるべきかという問題と関連しており、当然のことながら、これからの生徒たちの生き方に影響を与えていくだろう。

第九は、カナダの学校における自由な雰囲気と生徒の態度である。服装

は自由だし、ピアスやネックレスも O.K. で、ガムを噛んだりしている状況である。「授業中にお菓子を食べたり、足を机の上に置いている」生徒もいる。日本人なら、大人も子供も誰もが驚く状況である。しかし、そのような外見や態度にもかかわらず、「生徒達は見かけによらずしっかり勉強していました」と述べている。そして、生徒の一人が述べているように、「カナダの中学生は…自分たちのやるべきことを知っていて、色んな事をやらされているのではなく、自然にやっているって感じだった。周りの大人も監視とか強制するのではなく、そばに居るって感じだった。中学生は自分たちのやりたいことの時間をたくさん持っていた」というように感じたのである。そして、「自由な面があるからこそ満足に授業を受けられるんだなと思いました」と判断している。世田谷区の中学生のこれらの観察や判断は、彼らがこれから生きていく上で大きな影響を与えずにはおかないだろう。

第十は、他人との関係において、全身全霊で「分かり合おう」「伝え合おう」という努力をするという非常に貴重な体験をしたということである。このような体験は、生徒たちのそれまでの人生で一度も経験したことはなかっただろうし、想像もできなかった事に違いない。なぜなら、日本語でのコミュニケーションであれ、英語でのコミュニケーションであれ、日本社会ではそんな事態になる前に、その場から抜け出せば良いからである。全身全霊でコミュニケーションをするということは、このようなホームステイという状況だからこそあり得るのである。そこには、相手も必死になって「聞き取ろう」「伝えよう」と努力している姿があるのである。このような結果、「言葉を越えて、文化を越えて、お互いにつながりあうことができる」という感触を獲得できるのである。そして、そのような経験をしたからこそ、生まれて初めて、「もっと英語がしゃべりたい、もっと英語をリスニングできるようになりたい、もっと英語を知りたい」と思うようになるのである。

さて、以上のように生徒たちは様々な影響を受けるが、このホームステイという体験全体が、生徒たちを大きく目に見える形で変化させている。まずは、異文化の中でホームステイをやり遂げたという事が、達成感と自

信を生み出している。そして、そのような貴重な体験を成し遂げるには、ウィニペグのホームステイの人たちは勿論のこと、自治体の担当職員の方々や先生方、そして両親の力添えがあって初めて可能になったとの認識に至っている。それは、帰国後の生徒たちの様々な言動に現れているが、一番端的に現れているのが、本論でも触れたように「お母さん、ありがとう」という感謝の言葉であろう。さらに研修の段階から生徒たちにアドバイスをし、カナダにも一緒に同行して行ってきた担当職員の方が、「もう、ほんとに半年でこんなにも大人になるんだなって」と話してくれたように、カナダでの体験は極めて大きな影響を生徒たちに与えているのである。

## インタビュー

- ・第1回目聴き取り調査：2002年9月24日、世田谷区役所生活文化部国際課に於いて行われた小野村登氏(国際担当係長)、稲葉裕美氏との聴き取り調査。
- ・第2回目聴き取り調査：2004年6月21日、上記同場所に於いて行われた稲葉裕美氏との聴き取り調査。

## 資 料

- ・世田谷区役所生活文化部国際課「ウィニペグ市(カナダ・マニトバ州)との姉妹都市交流について」2002年4月1日。
- ・世田谷区役所生活文化部文化・国際課「世田谷区の姉妹都市——世界の人々との理解をめざして」。
- ・世田谷区役所生活文化部文化・国際課「第15回ウィニペグ市中学生親善訪問団受入日程」(平成16年3月16日～3月28日)。
- ・世田谷区役所生活文化部文化・国際課「第17回ウィニペグ市派遣世田谷区中学生親善訪問団報告書」2004年3月。
- ・世田谷区役所生活文化部文化・国際課「平成15年度ウィニペグ市派遣世田谷区中学生親善訪問団——補助金及び生徒参加者の自己負担額の経費計画」。
- ・東京都知事本局『平成18年度東京都区市町村の国際政策の状況』, 2006年2月。

### 参考文献

- ・市岡政夫『自治体外交』日本経済評論社，2000年。
- ・伊藤善市他編『自治体の国際化政策と地域活性化』学陽書房，1988年。
- ・市岡政夫『自治体外交』日本経済評論社，2000年。
- ・井上真蔵「異文化接触とコミュニケーション」、『北海道から』（特集：国際交流の光と影）北海学園大学，1985年。
- ・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係 ― 何を学ぶか ―」，北海学園大学国際会議場，日加修好75周年・日本カナダ学会及び北海道カナダ協会創立25周年記念事業。『めいぶる』北海道カナダ協会会報第71号・創立25周年記念号，北海道カナダ協会，2004年10月31日。
- ・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響 ― 牛久市とホワイトホース市のケースについて ―」，『人文論集』（31号）北海学園大学，2005年7月。
- ・井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響 ― 江東区とサレー市のケースについて ―」，『人文論集』（26・27合併号）北海学園大学，2004年。
- ・井上真蔵「国際化の一側面 ― 北海道とカナダとの姉妹都市関係について ―」，『北見大学論集』北海学園北見大学，1993年。
- ・島袋邦・比嘉良充編『地域からの国際交流』研文出版，1986年。

### インターネットのサイト

- ・ウィニペグ市の姉妹都市について。  
“New Winnipeg” (Winnipeg’s Digital Magazine), <http://www.ia-ibaraki.or.jp/ja/db/cia/cia017.htm>.
- ・カナダと日本の姉妹都市について。  
「カナダ・日本 姉妹・友好都市リスト」カナダ大使館ホームページ，  
[http://www.canadanet.or.jp/p\\_c/sistercity.shtml](http://www.canadanet.or.jp/p_c/sistercity.shtml).
- ・カナダの都市部における少数民族について。  
“Visible minority population, by census metropolitan areas (1996 Census)”, *Statistics Canada*, <http://www40.statcan.ca/l01/cst01/demo55d.htm>.
- ・世田谷区のデータについて。  
「知っておきたい世田谷のデータ」世田谷区役所ホームページ（平成15年6月），<http://www.city.setagaya.tokyo.jp/ward/symbol/symbol2.html>.

「せたがや統計情報館」(平成 18 年 5 月 1 日現在の人口と世帯), <http://www.city.setagaya.tokyo.jp/toukei/index.html>.

- 東京都 23 区の人口について。

「都市人口の概況 (平成 10 年 9 月 30 日現在) — 平成 11 年 3 月 31 日発表 — 全国市長会 — 資料編 — 2 政令指定都市の区・東京 23 区の人口」,  
<http://www.mayors.or.jp/research/jinkou/19990331/data/pop-tokyo.html>.

- 日本の姉妹都市について。

自治体国際化協会「姉妹提携一覧」, <http://www.clair.or.jp/cgi-bin/simai/j/00.cgi>.

- マニトバ州のホームページ。

Province of Manitoba, <http://www.gov.mb.ca/faq.html>.